

脇道

紺野修二

世間では、高齢者の独り暮らしは侘しいものだとよく言われている。特に男の場合、該当する知人の物哀しそうな様子は傍から見ても際立っているように思えたものだ。実際自分がその立場になって体験してみると、想像していた以上に侘しい実感が身に迫ってくることになった。

それまで元気そのものだった妻が、悪性の腫瘍が発見されてから僅か三ヶ月で黄泉の国へ旅立ち、その結果日常生活で私が全く無能だという事を知らされた。

伴侶を失くした喪失感は、すぐには現実だと認識することが出来ず、当初は生活の激変で生じた日常の雑務にただ追い回されていただけだった。侘しいと身に沁みて思うようになったのは妻の死から幾らか時間が経ち、彼

女がもうこの家には決して戻らないということを、現実として受け止めざる得なくなっただった。

妻の入院で掃除・洗濯等、生活の基本的な作業は少しずつ習得し、ゴミ捨ても慣れていった。会社と仕事が生きがいみたいな人生を送り、考えてみれば家庭のことにはそれまで全く関心が無かった。特に台所は男の入る場所ではないと勝手に決め付け、炊事は元より食器を洗ったこともそれまで数える程だった。これは私達世代にはどこでも見られる光景なのだろう。必要に迫られ、自己流で簡単な料理から手を付けざるを得なかったが、炊事にはなかなか慣れないままだった。

年が明けた頃から身体の不調を訴えていた妻の病状が、春先に大病院での専門医の診察結果、回復不可能と知らされた。なおかつ彼女に残された時間がわずか数カ月単位だとい

う医師の宣告を、最初他人ごとのように聞いていた自分がいた。人は誰でも認めたくないものへの反応は似たようなものではなからうか。予命を宣告されてからの看病には何の希望も見出せず、病人に気を遣わせないようにするのがやっとだった。

現実的な対応策は何も出てこなかった。現役時代には仕事ではやり手として評価されていたが、その能力は妻の不治の病には何の役にも立たなかった。私は単に、おろおろしている無能な初老の男に過ぎなかった。それまで続いていた妻との生活がまさかこんな形で突然終わることになるとは思ってもいなかった。

「何でこんなことに？」という疑問に対しては、「妻が先立つことは絶対あり得ない」と単純に思い込んでいた、としか答えられない。人は自分の都合いい様に理解していて、「そうあって当たり前」と思っていることに「何の根拠も無い」とある日突然思い知らさ

れる。

生活環境が全て破壊されたような予期せぬ変化に、それでも毎日やるべきことがあるのは、結果として生きることへの肯定的な反応となつて現れていたようだ。入院した妻に、自分では何もやってあげられないもどかしさが私を目先のこまごました雑事に没頭させた。多分これは正視出来ない現実からの逃避行動だったのだろう。

何もかもが混乱の内に過ぎ去り、いくらか正気に戻った時には、妻は私の前から永遠に居なくなっていた。当初、現実を受け止めようとする私の視点は常に不安定で、朝には食事の支度を調えた彼女が私を起こしにくるに違いないと真剣に期待した。また、妻の気配を感じた気がして何度も振り返ったが、彼女はそこに居なかった。

毎日が、そんな思いと無駄な期待の繰り返しだった。伴侶との突然の別れは、正常な神

経ではまともに正視することが出来なかったのだろう。

定年後には二人で旅行でもしようと思然とした計画はあったが、まだ、それも果たされないままだった。海外を主張する彼女に、旅行の嫌いな私が同意しなかったからだ。思えば、知り合いの子息の仲人として二十年以上前、ハワイでの結婚式に出掛けたのが私たちにとって唯一の海外旅行になった。その時、風邪気味だった私は殆どホテルの部屋で寝ていて、妻と観光をした思い出はない。また何時でも来られるという思いが私を怠惰にした要因だろう。

九州の私の故郷に数年に一度の頻度で彼女と一緒に訪ねたのが、旅行と言え言えなくもなかった。ただ、彼女がそう思っていたかどうかは分からない。

定年退職してから彼女と永遠の別れの時まで五年も経っていたのに、私は彼女の願いを

聞いてあげられなかった。もはや償いが出
ないという思いが募り、その後悔の念が何時
までも大きな心の負担となつて残ることにな
つた。

彼女が結婚前に送つてくれた手紙に「ある
ときは ありのすさびに 語らわで 恋しき
ものと 別れてぞ知る」という古今和歌集の
歌が添えてあつたが、それは正に今の私の心
境を語つてくれていた。ただ、「恋しきも
の」が「恋しき君」となつていたのは彼女の
率直な当時の気持ちを代弁していたのだろ
う。今となつてみれば、二人にそういう時代
もあつたと言うしかないが、この歌を思い出
すにつけ、私の喪失感の大きさは増した。
その寂寞とした喪失感は癒されることはな
くとも、生き物としての本能は命を長らえる
ための食欲を辛うじて満たしていた。還暦を
半ば過ぎた老体には将来へ立ち向かう積極的
な意欲と肉体のエネルギーは当時殆ど残つて

いなかっただのだろう。方向性を失くして
いて、生きるための取り組みが全て投げやり
になっていた。食事も出来あいものを買って
きて済ませ、かつて綺麗に片付いていた居間
も台所も漫然とした乱れが随所に目立ってき
た。掃除や洗濯も最低限必要となった時の
み、やむなく取り組む有様だった。

近所の公園に毎年咲く見事な桜も、今年
は彼女の入院で目に入らず、印象に残らな
かった。かつては必ず夫婦で何度か見に行
ったものだった。彼女の趣味で狭い庭に置
かれたプランターの幾つかは今では枯れて
しまっていて、残りも雑草と共生し、往年
の端正な姿は見ると影も無くなっていた。
植物にも細やかな気配りと普段の手当て
が必要なることを教えてくれる景色だっ
た。周りの移りゆく季節を感じる心のゆ
とりも、そして手を加える生活の余裕も
無くなっていたのだろう。

彼女が居なくなっただのは、短い梅
雨が空け

た頃で、暑い季節が苦手な私が仕舞い込まれた薄い肌着を箆筒の奥から探し当てた翌朝だった。私のその報告を夕方笑顔で黙って頷いて聞いていたのが妻との最後のやり取りとなり、次の日の早朝には、彼女は静かに病室で一人旅立っていた。あっけない別れだったが、苦しまなかったことだけが何よりの救いだった。痩せはしたが、端正な顔立ちには乱れが無く、まだかすかに残る温かさと穏やかな表情が私にとってには彼女からの語らぬ最後のメッセージとなった。

「ありのすさびに」語らなかつた夫婦は、多分私たちだけではないだろう。よしんば語ったとしても、語りつくせぬ思いは幾らでも残ると思われる。分身に先立たれた人達の共通の後悔と言えるかもしれぬ。それだけ相手に依存して生きて証だとも言えよう。これは私だけのことだろうか。

私は目標を失ったまま毎日を送っていた。

新聞の記事に目を通して頭には何も残って
いなかった。時たま付けるテレビも、興味を
そそられる番組はなかった。二人で必ず見た
骨董品の鑑定番組も、彼女の入院以来見なく
なっていた。我が家に独り居る時は、当初あ
らゆることに関心を失くし、心は閉ざされた
ままだった。

近くに住む娘から孫の授業参観に「代わり
に出てくれ」と頼まれたのは、秋の気配が東
京郊外の我が住宅街にも濃く感じられる時期
だった。その頃には私の気持ちも幾らか落ち
着き、自分で出来ることには努めて積極的に
立ち向うようにしていた。

娘は自分で行くことも出来たのに、私に何
がしかの役目を担わせることで生活の張りを
持たせようとしたのだろう。子供の小学校入
学を契機に娘は共稼ぎを再開していたが、出
勤や勤務時間に関しては自由裁慮の幅があ
り、今まで孫のことで私を煩わせたことは皆

無だった。

娘の思いやりを感じて、私はその役を引き受けた。妻が亡くなってから出不精な私のため週末になると孫を連れて我が家で料理をしてくれるようになり、時には彼女の亭主共々来て食事することが週末の約束事となりつつあった。「うちに来れば楽なのに」という娘の毎度のセリフに、私は笑って聞き流すだけだった。娘が料理してくれれば、残りで二日ばかり何とか賄えるのが私にとって助かった。費用を私が負担していたため、娘も我が家での調理に逆らえなかったのかもしれない。

娘は中学・高校の頃は反抗期のせいか、時折私を敵視するような目つきで見ることがもあった。だが、大学生になってからはすっかり変わり、今では細かいことまで良く気が付いて私にも色々な場面で配慮していることが理解出来た。ただ、気の強さはかみさん譲りで相変わらずだった。

気が付いてみると、今では一人娘と孫の存在が唯一私の心の支えになっていた。

孫の運動会で小学校には妻と一緒に一度来たことがあったが、教室に入るのは初めてだった。子供達の机と椅子が思っていたより小さかったのは新たな発見だった。小学生も二年にもなると生徒たちは父兄参観の約束事を理解していると見えて、想像していたより静かに授業を受け、先生の質問にも的確に反応していた。私たちの時代と比べると一クラスの子生徒数は半分程度で、子供たちも躰が行き届いていたようだった。孫娘は時折私の方を振り向き、笑顔を見せていた。担任の若い女性教師も、熱心な教え方やメリハリのある明るい指導に好感が持てた。

若い父兄に交じって高齢者の授業参観は私だけだと思ひ込んでいたが、母親とは思えない年代で落付いた雰囲気的女性が一人居た。共通する思いがあったようで、私たちは目が

合うとどちらからともなく会釈して互いの立場を確認し合った。品のある感じのいい雰囲気
の女性だった。

午前中一時間だけの授業参観が終わった後
で、話しかけて来たのは彼女の方からだった。
た。

「孫の参観という組みあわせは何時も私だけ
だったのですが、今日は肩身の狭い思いを
しなくて助かりました」

確かに若い父兄に交じったの授業参観は言
われてみれば違和感はある。何も考えないで
出て来た私は、彼女への対応に一瞬戸惑っ
て、「娘に脅されたもので」と言うのがやっ
とだった。その言い方がおかしかったのか、
彼女は打ち解けた笑顔と自然な口調で私をお
茶に誘ってくれた。

父兄は圧倒的に女性が多かったが、そこ
は出来上がったグループがあると見えて、そ
れぞれが散会后予定の行動を取っていたよう
だ。学校の近くには気の効いた店の心当りも

無く、最寄りの駅前にある私が知っているレストランの名前を上げたら、彼女もそこを時々利用することだった。学校から徒歩では十五分程の距離だったが、学園都市の色付いた見事な銀杏並木を見ながら私たちは歩くことにした。

知り合って間も無い魅力的な女性と歩きながらの会話は途絶えがちで、一緒に歩くことそのものが息苦しく感じられた。何かを意識している自分に気が付いていた。こんな感覚は久しぶりだが、彼女の素振りには堂々としていて何も不自然な様子は窺えなかった。こういった状況での対応は、女性の方がいつも落ち着いているようだ。

幾らか早めの昼食をレストランで注文し、私達は互いに改めて自己紹介をした。孫が同じ小学校の同級生という接点は、私たちに通常ある大人の壁を感じさせなくなっていたようだ。

この数ヶ月間、何時も独りで人恋しく思っ

ていた私には、未知の婦人との思いがけない
会食は、俗な言い方をすれば「渡りに船」と
いう表現がぴったりだった。

私の中に心躍るものが生じ、久し振りに表
現の仕様の無い、内側から湧き出る充実感を
憶えた。それは、あたかも喉の渇きに耐えた
山歩きの後に、自然の湧水に出会ったような
思いだった。

互いに連れを亡くしていることが分かり、
その共通点が現在のそれぞれの心情について
多くを語る必要を感じさせなかった。人は弱
点を持つことで他人に優しくなれるようだ。
しかも共通の痛みを持つ人間には、相手に対
する思いやりの心遣いが巧まずして出てく
る。

互いの電話番号と住所を確認して別れたの
は、かなりの時間が経った後だった。自分の
家で私の帰りを待つ娘の携帯電話からの催促
がなければ、二軒目でコーヒーを飲んでいた
最初のデートはもっと長引いていただろう。

「本屋で時間を潰していた」の言い訳を娘は疑っていなかった。彼女に学校からの連絡プリントを渡し、授業参観の報告を簡単に済ませて早めの夕食を共にしたが、娘も私の異変に気が付いたようだった。

「今日はお父さん何だか元気そうね」と平易な言葉で何時もとの違いを指摘した。孫の授業参観の効果だと信じていたに違いない。食事が済むと、引き止める孫娘にお小遣いをペナルテイーとして渡し、足早に我が家へ向かった。私は早く一人になりたかった。帰り道の足取りは軽く、気持ちも昂ぶっていたようだ。素晴らしい女性と知り合った僥倖を噛みしめていた。同時に自分の先走る感情も認識していた。それでも私は、不確実なものだったとしても何かに頼りたかった。

妻亡き後の数カ月、私は毎日溜息ばかりの落ち込んだ生活を送っていた。妻の影を追うばかりで、無いものねだりの心境だった。妻を思うことが供養になると聞かされたせいも

あったのだろう。また自分自身も他に道があるとは思えず、簡単にはこの暗いトンネルから抜け出せないでいた。こういう時、思い出すのは妻に浴びせた心無い言葉の数々で、「ありのすきび」に私は不平ばかり漏らしていたようだ。気の強い妻も負けずに言い返していたのが、今となれば幾らかの救いになっていた。

こういった暗い毎日、品の良い婦人との出会いで何がしかの変化の起きる予兆が私には感じられた。むしろ、それは期待と言った方が正しいのだろう。

孫の授業参観で知り合った婦人とは毎日携帯で連絡を取り合うようになり、彼女が一週間ばかりの墓参りを兼ねた里帰りの後、この前のレストランで食事する約束も取り付けていた。

私の日常に目に見える変化が現れてきた。午前中は殆どパジャマで過ごしていたのが改

まり、居間も台所も少しづつ前の輝きが戻ってきた。

プランターの枯れた植物は取り去り、雑草も丁寧に処理した。玄関のドアに付いた埃やガラスの汚れも綺麗に拭かれ、家自体にも精気が満ちてきているのが実感出来た。これは私の中にやる気が起きたせいだろう。毎日の生活に張りが出て、リズムが生まれてきた。

この変化を亡き妻には申し訳ないという思いが幾らかあったが、彼女は許してくれるだろうと勝手に解釈もしていた。私には何らかの生き甲斐がどうしても必要だった。

仏壇に置かれた遺影は元気だった頃の笑顔をのぞかせていて、今の私に「好きなように」と言っているようだった。

少しばかりの後ろめたさで、「生きていくには何かが必要なんだよ」と彼女に言い訳している自分がいた。この拘りは何をやるにしてもこれから終生私に付いて回るのだろう。

この前よりカジュアルな服装の彼女は、見
違える雰囲気です。ランに現れた。五十三
才と言っていた年齢には見えず、四十代前半
でも通用しただろう。家内にも時々驚かされ
たが、女性は髪形・化粧・服装で年齢を超越
出来る能力を持っているようだ。私は卒直な
感想を口にした。「若いので見違えました」
彼女は嬉しそうな笑顔で、私にも「お若か
く見えますわ」と返してくれた。確かに少し
気の効いた好みのジャケットを用意していた
のは事実だった。そこには孫を持つ初老男女
の姿は無く、何かを期待する華やいだ現役の
カップルが居た。少なくとも私はその日の妖
艶な彼女に女を感じ、唐突に欲情を覚えた。
家内の発病以来収まっていた性の衝動に火が
付き、私に若い本能が甦ったようだ。それは
厄介だが嬉しい反応でもあった。また、それ
が現実離れした願望だという冷静な判断もま
だ持ち合わせてもいた。

彼女も夫を亡くして五年の時が経っている

と聞いていたが、肝心なことをどう処理しているのか不埒な疑問も生じた。最初の食事の時は主に自己紹介を兼ねた互いの個人的ヒストリーの話だった。二度目の今回は、各自の趣味や政治・社会的な時事問題にも意見を交わした。彼女の聡明な受け答えで多岐に亘って話は盛り上がり、特に彼女が音楽について造詣が深いことが分かった。クラシックのみならず軽音楽にも通じていて、ジャズの分野では好みの曲や歌手が殆ど一致した。その知識は並みの音楽好きの範疇を越えていた。

私は彼女を我が家に誘ういい口実が見つかって内心喜んだ。彼女はニューヨークに夫の仕事で駐在していた時、本場のジャズ音楽に目覚めた、と語ってくれた。

食事が終わり、デザートケーキとコーヒーが来る前に私は思い切って誘いの言葉を掛けた。「良かったら、これから我が家でレコーディングでも聴きませんか。大したコレクション

ではありませんが、幾らかありますから」
私の誘いに彼女は躊躇なく「有難う御座います」
と応え、「ぜひ」と付け加えた。
話があまりにもスムーズだと人は不安になるものらしい。魅力的な女性と、こんなに順調に話が進んで良いのだろうかという疑問が私に生まれたが、その時の私の勢いは半端なブレーキでは止めようがなかった。
割り勘を主張する彼女の申し出を断り、払いを済ませて店を出ると二十分程の我が家への道則を歩くことにした。「食後の運動に一度いいですね」と彼女も同意した。
手を組みたかったが、遠慮した。私は久しぶりに心躍る気持の昂ぶりを味わっていた。分別を弁えた大人の対応ではなく、自信の無い青春の日の若者になっていた。しばらく忘れていた感覚だった。

家内の発病以来、家ではアルコールからも遠ざかっていた。一人では飲む習慣が無かつ

たし、飲む気にもならなかったと言った方が正確だろう。夕食時、ワインを美味しそうに飲んでいた彼女にワゴンにあったレミー・マルタンを勧めた。彼女は断らなかった。しばらく使っていなかったブランデー・グラスを洗ったら見違えるような輝きが戻った。思えば、酒が好きだった家内の為にジョージ・ジャンセンの店で昔求めたもので、安い物ではなかった。

私が最初に選んだアルバムは「エラ・イン・ベルリンへ1960年」だった。彼女の最盛期とも言える時代のベルリンに於ける公演を収録したもので、今では彼女のベストアルバムの一つとして高い評価を受けている。ジャズファンなら聞き逃さない一枚だ。

「私もこのアルバムを昔聞いて欲しくなかったのですが、手に入らなかったのです」とジャケットを手にしたがら彼女は眼を輝かしていた。この中の「マック・ザ・ナイフ」と「ハウ・ハイ・ザ・ムーン」が好きだと収録

してある曲まで覚えていた。

私は自分の選択が良かったことに安堵した。エラのアルバムならギターのジョー・パスやピアノのビル・エバンスとのデュオもあった。彼女は全てを聞きたがった。

「エラの歌をLPレコードで聞いたのは久しぶりですわ」と彼女は満足した表情で私に話し掛けて続けた、「オーディオセットもいい状態で保管されていますね」

かなり以前に揃えたもので、特別に漉いた紙で出来たウーハー（スピーカー）の振動部分は今では珍しいとされている。クラシックにもジャズにも適応出来、特にLPレコードからの歌や演奏は、CDのデジタル再生では出せない味があった。オーディオも、かなりの値段がしたのを憶えている。

ブランドイー・グラスを手に私達は食卓から背の低いソファーに移り、並んで座った。照明を暗くした居間はBGMのお陰で二人の垣根を取り払ってくれたようだ。二枚目のL

Pに変わり、ビル・エバンスのピアノ演奏でエラの歌がリズム感のあるスイング調の曲に移った時、彼女の手を思い切って握った。殆ど衝動的な行動だったが、私の手を握り返した反応に意を決した。薄暗い照明で妖艶に微笑む彼女の口に私の口を重ねた。スローモーションの画面で見るとなゆつくりした動作だった。その瞬間、二人の間の高い垣根がいつぺんに取り去られ、私たちは互いに抱き合った腕に力を入れた。互いの舌を絡ませる長く熱い口づけが続いた。彼女は期待していたかのような受け止め方で、二人の行動はあたかも演出された映画の場面の自然な流れを感じさせる展開だった。そこでは、異性を知り尽くした大人の儀式が始まっていた。あたかも長年付き合っている男女の雰囲気、既に生まれていて、互いの身体を弄る手付きには躊躇もぎこちなさも無かった。彼女の手がそこに伸びてきた時、私のものは既に硬直していた。同時に、彼女も充分潤っている

ことが私の指先には先程から感じられていた。無言の闘いは、エラの歌とエバンスのピアノが終わり、レコードの上を滑る針のかすれた音になっても、構わず続いていた。若い時とは違い先を急がない大人の戯れは濃厚な色彩を次第に増していった。先程から続いている指の攻撃に彼女の息が乱れ、下半身の震えが一瞬止まると深い吐息と共に絶頂に達した。それでも止めなかった微妙な指の動きは、二度目、三度目の喜びを立て続けに彼女に与えていた。緩やかな指の動きに自分の局部を押し付け、苦しみの表情を浮かべながら何度も深く極みに達した。「忘れていたものが蘇って、思わず取り乱してしまいました」呼吸が整った後、彼女は自分に言い聞かせるような口調で呟いた。その間、終わりを迎えていない私の硬直したものはまだ彼女の手の中にあつた。話しながらも、彼女の微妙な手の動きは続いていた。慣れ親しんだ夫婦か

恋人のような仕草だった。

衝動的な私の働き掛けから新しい展開が始まった夜だった。私には後悔も反省も無く、彼女が素直に反応してくれたことが有難かった。

それにしても、見るからに気品を備えた女性が、私の指であれだけ乱れる様は、後で思い出しても興奮した。男性は女性の落差に心が躍らされるものだ。表面的には肉の欲望とは全く縁のないような女性が、押えきれない喜悦の喘ぎで自然と自分を漏らし、最後は絶叫に近い声まで出していた。女性の秘められた欲望の深さを新たに思い知ることになった。

その夜、私は亡くなった妻に義理だてした訳ではないが、それ以上の段階に進むことはしなかった。求めれば彼女は受け入れただろう。もしかしたら彼女はそれを望んでいたのかもかもしれない。だが、妻と共にしたベッドに彼女を、その夜すぐには誘う気になれな

た。私にはまだ何処かに拘りが残っていたの
だろう。
そしてもっと根本的な不安が私にはあつ
た。

約ひと月の間、私達は十代のカップルみた
いなデートを続けた。食事の後我が家の居間
でレコードを聞きながら互いに指で確かめ合
うのだが、いつもそこまでだった。彼女は毎
度高みに達し、数回の絶頂を素直に喜んだ。
だが、成熟した大人としては変則的な指だけ
の営みで終わることに、彼女が疑問を感じる
のは当たり前だった。
何時もそれ以上求めない私に彼女は幾らか
不満そうな様子を見せて、「奥様に義理立て
されているのですか？」と問い詰めて来た。
もう、その頃には正直言って私の心境には変
化があり、亡き妻への贖罪感は薄れていた。
私は腹を決めて正直に打ち明けた。

「私達夫婦は彼女が体調を崩すまで定期的

な営みは続いていたのですが、この二・三年私のもものが途中で役に立たない状態になるとがあり、時折中途半端で終わっていたのですー

私はカウンセラーに相談するような心境で彼女に全てを正直に語った。付き合いだしてからの時間の経過を考えれば、肝心なことを何時までも隠しておく訳にはいかない状況だった。

「そんなこと気にしないで、私で良かったら挑戦してみてください。立派に反応していますのできつと旨くいきますからー

もし途中でだめになったらどうしよう、という不安感がそれまで私のブレーキになっていた。だが彼女が帰った後は必ず独りで彼女の敏感過ぎる程の反応を思い出しながら処理していた。若い頃を思い出させる元気さと力強いつ放の脈動が蘇っていた。

妻と不調に終わった時も独りでなら何とか終わらせることは出来ていた。あの頃より今

の方が充実しているという意識はあったのだが、彼女との営みで恥をかきたくないという思いの方が強かった。打ち明けたことによつて幾らか気が楽になり、私は意を決した。

「今日は泊まっていきませんか？」という私の誘いに彼女は微笑んだまま頷いた。

事情を知った上で「私で良かったら挑戦してみてください下さい」という彼女の励ましが私の救いになった。今夜も何度か絶頂に達していた彼女を愛おしい気持ちで思い切り抱きしめた。

互いをまさぐり合った仲では、一緒に風呂に入ることには違和感は無かった。中背のふくよかな色白の裸体は、想像していた通り豊満で熟れた女の色気を感じさせた。下腹部の茂みは片手で隠れるくらいの広さで、細い微妙にうねった様や密生度と長さは、品のいい佇まいを醸し出していた。だが、眼に映る実像は官能的でもあった。既に指は確かめていたが、目で全貌を見たのは初めてだった。背中

を流し合う姿には、慣れ親しんだ熟年カップルの落ちつきさえ見えた。

私のものは若者のように硬直したまままで、彼女はそのことを賞賛しながら優しく丁寧に洗ってくれた。その夜の準備は粛粛となされていた。

還暦を迎えるあたりまでは、私は男として充分活躍していた。三歳年下の家内から、時として呆れたような称賛の声も上がったが、本当に歓迎していたのかどうかは分からなかった。

会社は満六十歳で潔く辞めた。系列会社へ役員としての再就職を会社から斡旋されたが断った。反対する妻に、「これは俺の生き方の問題で、少々の収入が保証されてもいやだ」と我儘を通じた。家のローンも終わっていて、退職金と会社年金や厚生年金で贅沢しなければ何とかやっていけるといふ計算があ

った。本音で言えば、会社勤めの人間関係に嫌気が差していたからだ。長い会社勤めで、ある意味人間不信になっていた面があった。信頼していた同僚から裏切られた経験は何度かしたし、私を高く評価してくれていた上司に仕事の手柄を横取りされたこともあった。それに客筋の横暴さも頻繁に感じられるようになった。入社した当時と退職する頃では、全く違った会社になったような印象を持っていた。同じことが客筋にも言えた。利益至上の社風になり、社員もいつの間にか上司に唯々諾々と従い、自分の身を守るだけ、問題意識を持って各自が判断する伝統が薄れていた。

仕事は出来たが、拘りを持つ私は上司に煙たがられることが多く、役員への道は「自ら閉ざしている」と社内で噂されていた。

辞める頃には、同じ会社で働く仲間に対し疑心を持ったまま接することに嫌気が差していた。一流と言われている企業でも、人間が

皆一流とは限らなかつた。世間で認知された高いランクの大学を出ていても、仕事や人格の上でのその評価は、全く当てにならないことが多かった。

人間的に魅力のある上司も居たが、彼らは総じて出世争いから縁遠く、脂ぎった野心家との出世競争では所詮勝負にならなかつた。ただ、彼らとの個人的交流は私にとって学ぶことが多かった。素晴らしい知性を備えた人も居て、私も影響を受けたが、彼等が居なくなつた組織に残ることに、私は興味を無くしていた。そこは決して知性や教養が支配する社会ではなく、実績を上げたたかな商売人が我がもの顔に振る舞っていた。私のか細い神経では彼らに伍して行く気概も自信も無かつた。取引のある相手と築き上げた人間関係も次第に希薄になり、全てが利益優先の仕事で動いていた。社会も会社も四十年近くの時経過で変質し、もはや自分が求めるものはそこに何も残ってゐなかつた。井戸を掘

った人はすぐに忘れられ、誰もそれを疑問に
思わなくなっていた。
自分が人生の大半を過ごした時間が無駄だ
ったとは誰も思いたくないだろう。男にとつ
ての仕事は、生き甲斐にならなければ意味が
無いと思っていた。そこに疑問が出た為の私
の選択だった。
退職後は趣味に生きる、と漠然とした方向
性は決めていたのだが、肝心な趣味を探し出
せないまま時だけが経っていた。仕事の無い
毎日の時間が、とても早く過ぎ去ることに驚
いた。当初、朝から妻に挑むこともあり、そ
れなりに新鮮な感激を憶えたが、それも長く
は続かなかった。肝心の私の男の部分が疲れ
を見せ始めていたからだ。肉体的衰えを現実
のものとして嫌でも認めざるを得なかった。
引退後の生活に確たる目的が無くなり、精神
の張りまで失くしていたようだ。
その矢先に妻に先立たれた。

風呂場で互いの身体を洗ったのは結果として内なる情念を高める効果があったようだ。妻専用だった液状のソープを手に塗り、全身を撫で回していたのが私達の巧まぬ前戯となっていた。彼女はそれだけで充分に感じ、吐息や身体の細かい震えが、内部からの高まりを表していた。立たせた彼女の秘部へ舌の訪方が始まると、堪え切れない様子で切羽詰まったような呻き声を漏らし始めた。その内、膝が諤々とし「立っておれない」と彼女は訴えてその場にしゃがみ込んでしまった。明りを落とした寝室のやや大きめのセミダブルベッドで、私達は素肌の上に湯上りのガウンだけだった。夜は少し冷えて来た時期だった。が、火照った身体には心地良く感じられた。

ベッドで横になった彼女への口づけは長く乳房に留まった後、次第に下へ降りて行き、仕上げとして中心部への本格的な舌での奉仕がまた始まった。彼女はその間言葉にならない

い呻き声を出し続けていたが、核心部に辿りついてから明らかにその調子に切迫感が生じて来た。全身で反応する彼女は風呂場で聞いた声を又漏らし始めた。既にそこは液体で溢れ、口が離れると長い細い透明な糸が垂れてきた。半端な濡れ方ではなかった。

だが、残念なことに、風呂場まであれだけ元気だった我が分身は、この肝心な時に眠ったままだった。私は観念して口だけで彼女が絶頂に達するまで奉仕することにした。丹念に続いた微妙な舌技に、徐々に彼女は全身に力を入れ始め、やがて痙攣が襲ってきた。痙攣の波が何度も繰り返された後、「いく」という突然咆哮に似た叫び声と共に彼女は身体を硬直させ、絶頂に達した。今までの指だけとは、全く違った反応だった。

私にとって彼女が見せた終盤の激しい腰の上下運動はただただ驚きで、その動きに付いて行くのが精一杯だった。女性の内に秘めた淫靡なエネルギーのパワーを、改めて思い知

らされた。また、それは彼女の普段の優雅な物腰からは絶対窺い知れない姿でもあった。ぐったりと裸のまま目を瞑って横たわっている彼女に毛布を掛けると、私は枕元の小さなテーブルの上に置いていた缶入りのピースを口にした。妻の病気が発見されて以来煙草を止めていたのに、私の悪習は彼女が居なくなつて直ぐに復活していた。一人残つて健康で長生きしてどうすると開き直っていた。狂乱の宴が過ぎ去つて、自分だけその宴に入れなかつた醒めた男が、自虐的に秘められた時を振り返っていた。男の役目を最後まで遂行出来ないもどかしさを痛感させられ、旨く感じない煙草も直ぐに消した。豪華なご馳走が目の前に出されているのに、口に来ないもどかしさだった。だが、「あわてることはない」と自分に言い聞かせ、いずれ以前の猛々しさが戻るだろうと根拠無く期待した。深刻な焦りが無かつたのは正に年の功だろう。指と口での奉仕で彼女が喜ぶのであれば

それで取り敢えず満足するしかなかった。

その夜「帰る」と言い出した彼女を自宅まで送って戻った後、自分で放出することは出来た。それは既にいつもの儀式になっていた。その日の孤独な作業は彼女の反応を思い出しながら非常に高い満足度で終えることが出来た。また、その分身には皮肉なことに高い硬度が戻っていた。だが、泊まらないで帰った彼女が、私のところに戻って来る自信は無くなっていた。

私の心配は杞憂に終わったようで、嵐のような彼女の狂乱から丁度一週間後、手料理の招待を受けた。正直、ほっとした気持で喜びが込み上げてきた。

彼女の住むマンションは、私の自宅からタクシーで十分も掛らない繁華街の方向にあつて、幹線道路から一つ入った静かな道路沿い建っていた。昼間は散歩がてらに歩いてても苦にならないが、夜遅く特に酒が入ると歩きた

くない距離だった。何度か送って行っても、遅いせいもあって何時も建物のエントランスで別れていた。誘われたこともあったが、まだ部屋に入ったことはなかった。新しい、かなり立派な造りのマンションだった。

少し早めに自宅を出た私は、商店街でタクシーを降り目星を付けていた花屋に寄った。正確には名前も知らない百合に似た花を中心に、その店員に花束を見繕って貰った。すぐ隣にあった酒屋で、思い立ってワインも買った。

インターホーンで玄関のドアを開けて貰い、彼女の最上階の部屋へ急ぐ私には、デパートに心躍らせる若者の心境が幾らか残っていた。彼女は艶やかな笑顔で迎えてくれ、恋する乙女のように目を瞑ったまま私に口を突き出してきた。花束とワインを玄関にあった小さなテーブルに乗せ、両手で彼女を抱きしめると長い口づけで応えた。彼女の全身に歓迎のオーラを感じた。

「もう、お呼びではないと半ば諦めていた」と言う私に「馬鹿ね」と笑いながら又抱きついて来た。

「独り暮らしだとい手を抜き、手の込んだ料理もしなくなつて」、と言いながら出された大きな目の皿には、数種類の洋風前菜が盛りつけられていた。

「男所帯はもつと味気なくて、つまみは出来あいで済ませています」と、むしろ自分に言い聞かせて私は持参したワインの栓を開けた。

部屋に入った時から気が付いていたが、品のいい香りはかなり上質のお香だと思われた。BGMはシャンソンの曲で、エディット・ピアフの歌が流れていた。結果として赤ワインは、つまみと音楽に合い、我ながら良い思い付きだったと一人納得した。

期待に膨らんだ大人の夜はワインと食事から幕が開き、どんな筋書きが展開するのか予想が付かなかつた。だがドラマの終着だけは

互いに認識していた筈だ。それでも先を急がないのは大人の分別であり、また、それは若さの喪失なのだろう。飲み物も食べ物も、早く腹いっぱい詰め込む年代はとつくに卒業していた。

私はゆったりした時間の流れをむしろ楽しむ心境でいて、彼女の対応や物腰も同じ流れに身を任せているようだった。先を急ぎとうしない二人には、それでも暗黙の大きな最終目的があることは互いに分かっていた。「今日こそー、という思いはむしろ彼女の方が強かったのかもしれない。

その夜、彼女が語ったニュー・ヨーク滞在中の経験は興味深かった。副支店長として夫の赴任のためそこに住んだ時、彼女はまだ三十代の半ばで、若い時生まれた娘が既に小学校高学年になっていたそうだ。日本語学校に通ったにも関わらず娘は直ぐに現地のテレビを理解するようになり、英語力の進歩には親は付いていけなかったと正直に打ち明けた。

また、ベッド・ルームにあったテレビでは、有料で大人限定だったが、アダルト物は何のぼかしも無く放送されていたという。外人女性の積極的な男女の営みへの参加は、彼女の性に対する姿勢を根本的に変えたそうだ。喜びは充分知っていたが、それまでどこかで自分を偽っていたことを彼女は認めた。学ぶことが多くあったと正直に打ち明けてくれた。

淑やかな外見と違ってあらゆることに積極的な言動を彼女が取るのも理解出来た。三代での異文化との出会いが彼女を変えたのだと納得した。アメリカには娘が高校を卒業するまで七年間滞在したという。その娘は帰国子女の枠で東京の著名な大学に入り、卒業と同じ年に恋愛結婚したそうだ。若いのに彼女に小学生の孫がいる理由が分かった。

私が風呂を勧められたのは、食事が終わって既に二時間以上も経っていた。舞台装置や私の期待にも関わらず、その夜は何事もなく

帰るべきだろうかと思ひ始めた頃だった。

「お泊りになれるでしょう？」という彼女の誘いに、私は喜んで頷いた。半ばその気で招待を受けていたものの、さすが自分からは言い出し辛かっただけだ。

「夫と住んだ家は処分して、娘夫婦の近くに出来たマンションを買いましたのー」という彼女の説明から、この新しいマンションを選んだ理由が分かった。彼女の夫の影が無い住まいに幾らか安堵していた。調度品も部屋に合わせて新しく揃えたと見えて、全てに違和感が無く、部屋の広さや機能に合っていた。女性の独り住まいとしてはかなり豪華な趣だった。

案内された風呂場もゆったりとしていて、驚いたことにジャグジーまで装備されていた。これもアメリカ生活の影響だろう。あたかも気脈の通じ合った夫婦のような自然な流れでことは進んでいたが、私には拭い切れない不安が残っていた。しかし、その不

安は前回の失敗にも関わらず、必ずしも深刻なものではなくなっていた。還暦を過ぎた男の幾らか醒めた目で観察する姿が背後にあった。

先に風呂に浸かっていた私に、「今日はお任せ下さい」と彼女は前も隠さず、にこやかに語りかけながら風呂場に現れた。下腹部の陰りに変化があり、一見無毛にみえたが、草原の面積が極端に狭くなり、残った草も短く手入れしてあった。

彼女がジャグジーのスイッチを入れると、勢いよく泡を伴った強い流れが四方から身体に当たって来た。初めての経験だったがすぐ慣れて心地良かった。ただ、その噴流の一つは下腹部を狙い撃ちするかのように私の物を捉え、それが左右に首を振るような動きになっていた。経験したことの無い微妙な感覚が身体の内側から湧き出て来た。

彼女はその動きを見逃さず、私のまだ柔らかな状態の物を手にすると流れの一番強い中

に導いた。先端に当る水圧は微妙な刺激を繰り返し、直ぐ私の物には力強い根が出来始めた。感じ易い尖端の裏側を集中的に攻撃する噴流は、確かな快感を与え始めた。

この感覚をもっと味わいたかったが、彼女は自分の身体が温まると私に風呂から出るよう促した。優雅な彼女の日頃の物腰からは想像出来ない積極的な振る舞いだった。私は余計なことは考えず彼女に任せることにした。身体を拭くと裸のまま居間を横切り、ベッド・ルームに案内された。全てが彼女のペースだった。

ベッドは大きく、我が家にあるセミダブルサイズとあまり変わらなかった。部屋は動物性だと思われる香水の香りに満ちていて、官能を直接刺激してきた。音を低めにしたムード音楽も彼女は流し始めた。

前回と違い、上を向いてベッドに横たわった私に彼女が積極的に働き掛けて来た。長い

口付けの後、彼女の舌の動きは次第に下半身へ降りて行き、最後は支柱の周辺を丹念に彷徨い続けた。ジャグジーの効果で根が出来かかった支柱は、まだ舌が触れていないにも関わらず確かな反応を示し始めていた。支柱の根元から先端に向けて丹念に舐め上げ始めると、柱には往年の雄姿が甦り、先端が口に呑みこまれた時には、若い時の野性が完全に私に戻って来た。

彼女は私の支柱を啜えたまま身体を入れ替えて、自分の下半身を私の顔の上で広げた。上になった彼女は私に体重を感じさせない姿勢で支柱への攻撃を続け、さらに自分の花園を私の口に強弱を付けた微妙なリズムで押し付けて来た。口に当る個所は雑草が綺麗に刈られていて、邪魔なものは一切無くなっていた。女を象徴する佇まいは、内面の高まりを視覚でも確認出来た。分厚い唇の半ば開きかかった入口は、メスの発情を現わしていたが、それだけでは終わっていない趣があった。

雑草の手入れはこの為の準備だったと理解した。

そこは濡れていると言うより、既に溢れていると言った表現が当たっていただろう。粘りのある透明な液体は花園の泉から継続的に流れ出していた。熟れきった果実は私の目前に晒されていて、私の食欲をそそるような光景を繰り広げていた。彼女の支柱への口撃は執拗に、休みなく繰り返された。尖端を呑み込まれた支柱の濃密な感覚は、例えようがない程巧みな舌と口の動きで生まれていた。女房には内緒で何人も女性と結婚後にも関係を持ったが、これ程の卓越した技巧を持った女性には出会ったことが無かった。

彼女は主導権を保ちながらも、確実に自分も高みに向かっていった。口で支柱を啜えながら絶えず漏らす喘ぎと腰の動きがそれを私に教えてくれた。私に出来ることは丹念に彼女の滴る花園に舌と口でお返しをすることだった。そこから漂う官能を刺激する香りは、自

然のものだろうか。いずれにせよ、その匂いに雄を興奮させる何かを感じた。彼女の身体の反応から、何度か軽く達したことが感じられた。その度に私も限界を越えそうになったが、辛うじて持ち堪えることが出来た。幸いに支柱はしつかりとじていて、その硬度を失わないでいた。終わりの無い闘いに思える程、長い口技の時間が経ち、やがて満を持して彼女は私に上から挑みかかってきた。命を吹き込まれた支柱は彼女の花園を深く突き刺し、その雄姿を誇るかの様に彼女の上下運動の攻撃を持ち堪えた。彼女の微妙に変化する動きと何かを必死に堪えているような喘ぎは、彼女の最終爆発が近いことを示していた。荒馬の上で踊るような彼女の動きが終焉を迎え、支柱を締め付ける強烈な反応と共に自爆した。その瞬間、殆ど悲鳴に近い声も出された。私の上で荒い呼吸が暫く続いた。

幸いに私の分身はまだ猛々しくその存在を

誇っていた。絶頂の余韻に浸る彼女を今度は私が攻撃する番だった。立場を変えて下に組み敷かれた彼女は、私に強く抱きつき身体の自然な反応に任せるまま、何度もそれから達することが出来た。雄の本能と実力を取り戻した私は、何かに復讐するかの如き力強い抽送を続けた。正にそれは荒々しい攻撃としか表現の仕様がなかった。

彼女の、歓喜の表現は恐怖の叫びとなり、それを何度か繰り返すと、最後は失神状態で追い詰められていた。私は男の自信を取り戻し、勝ち誇ったまま彼女の絶頂に合わせ、締め付ける中に放出した。しばらく、私の物を絞り出すような局部の動きで余韻を楽しんでいた彼女は、やがて私の身体に巻き付けた腕を、吐息と共に解いた。華美で、壮絶な営みだった。

裸でまどろむ優雅な彼女の寝顔に、先程の狂乱した姿態を連想させるものは何処にも見

られなかった。快樂の頂点を求める男女が繰り広げた営みは、日常から乖離した別次元での出来事にしか思えなかった。

私は男を取り戻せたことに安堵を覚え、裸のまま眠りに落ちた。

「少し飲みませんか？」と声を掛けられた時、浅い眠りから目を覚ましたが、私はまだ現在目の前で起きていることを完全に理解していなかった。自分が裸で、いつものベッドではないことが分かり、そして彼女が微笑んで語りかけていることを順繰りに確認して、やっと現実に戻った。

彼女はパジャマの上に真っ白なガウンを掛けていて、私には新しい浴衣が枕元に用意してあった。素肌に浴衣を着て居間に戻ると、そこは既に夕食の残骸は綺麗に片づけられていた。それに、私の好きなトニー・ベネットの歌が流されていた。

サイドボードには洋酒が何本もあり、封の

開いてないスコッチが何本もあった。
「一時に寝酒で飲むだけですから、なかなか減りません」と言いながら、未開封のバレンタイン二十五年物を彼女は選んだ。
「この酒なら、オンザロックが良いでしょう」という私の提案に彼女は従った。
グラスを手にした時、壁面の時計は十時を知らせた。風呂に入ったのが八時を過ぎていて、さらに二人が没頭した時間を考えれば、一時間ばかり眠ったことになる。男として義務を果たせた達成感から、バレンタインの豊潤な味を、高揚した気分で楽しむことが出来た。全ての重圧から解放された感覚を久し振りに自覚し、無為に過ごさざるを得なかったこの数カ月の暗い日々の不快さが無くなっていった。それが一過性の今夜だけのことか分からないが、今の私には貴重なひと時には違いなかった。本音で言えば今の精神状態が永遠に続いて欲しかった。

酒が回って来ると、彼女は先程の二人だけ

の時間が「細胞の隅々まで活性化してくれたようですよ」と面白い表現で、自分の満足度を説明した。

さらに、「取り乱してしまつて恥ずかしい。でも、久し振りに堪能しました」と付け加えた。偽りの無い彼女の本音から出た率直な感想なのだろう。

「殿方は繊細なので、ご自宅では矢張り遠慮があるのでしょね」と微妙な気遣いまで見せた。言われてみれば、本人が意識してなくても亡き妻が心理的な影響を与えていることは否定出来ない。自宅のベッドで男の役目を果たせなかったのは、妻への義理立てが私を縛っていたと思われても仕方がなかった。

何時も感じていることだが、彼女は品性を汚さない、抑制の効いた本音で自分の考えを述べている。性に関しても、決して必要以上に隠したり、恥じらったりはしない。それでいて奥床しさを失くすことはなかった。多分

生れつき身に付いた感性なのだろう。匠の手によつて、洗練された料理を完成させる手順に匹敵するような彼女の対応だった。とことん悦楽を追求する食欲な姿勢でも、人の持つ動物的本能を見事に調理し、極められたものへと昇華してくれた。その手際には彼女の持つ品位を、決して損なうような影は見えなかった。この感想は、単に私の「惚れた弱み」の買い被りではないと思えた。

「今夜は私の復活祭でしたよ」とグラスを乾杯のため高く挙げると、「本当に良かったですね」と彼女もグラスを合わせて喜んでくれた。

「私の予感当たったでしょう」と得意そうな表情を見せた。確かに、彼女の協力が無くては達成出来なかっただろう。互いにとつて望む結果となった。

若さと本能の赴くままに何時でも簡単に出来たことが、年齢を重ねると難しくなり、ま

たその内容も時と共に変化することがある。溢れんばかりの勢いと再生能力を誇った若い時代には、愛の交歓に於いても単に自分の欲望の処理が先行し、余裕を持ってパートナーを見守り、思いやりの行動を取ることには少ない。ピークが過ぎ、なだらかな下り坂でふと気が付くと、前のようにはいかなくなっていることが多々出てくる。特に男の場合、その気があっても実行出来なくなる時もある。一方、互いに豊富な経験者同士が、相手を思いやりの気持ちで協力した時、達成出来ることもあるようだ。今夜はそのいい例なのだろう。

長らく遠ざかっていた至上の悦楽は、彼女にとつて忘れ去った訳でも、諦めた訳でもなかったのだ。内なるものの期待は会う度に高まっていたと思われるし、兆候はその都度感じられた。何より身体の反応の変化が正直に物語っていて、彼女がまだ充分に現役の女性だったことを証明していた。

そして今日、互いに求めていたものに到達することが出来た。私も、自分に雄の本能と逞しい野性がまだ残っていたことを確認出来て安堵した。

男と女にとって愛の最終的な目的は、互いに究極の快楽を極めることではないだろう。か。快楽は下半身の肉体的反射ではなく、頭と精神で感じるものだ、とつくづく思った。それは本来遠ざけたり、隠したりするものではない筈だ。男女が求め合うのは自然の摂理としか言いようがなく、その行為そのものが動物的であつても何ら恥ずべきことでもない。

唯物的に捉えれば、動物には周期的に決まった発情期がある。しかし人間は何時でも発情出来る。しかも実際に行われていることは本来の生殖行動とは関係の無いことの方が圧倒的に多い。

神に与えられたこの人間だけの特権を、素直に受け止めることから全てが始まるのだら

う。彼女に感じる自然な対応は、既に彼女が
こういったことを理解して、ありのままに受
け入れる心の準備が整っているからに違いな
かった。世の中のありきたりな既成概念に束
縛されない、自由な視点を持つ大人の判断だ
とも思えた。

また、我々の背景には互いに何の社会的束
縛も存在しなかった。二人の関係は賞賛され
ないまでも、誰からも何ら非難される理由は
無かった。

私は小心者の気遣いと、物の道理から導か
れる本来のあり方の差に何時も揺れていた。
多分男とはそういう存在なのだろう。

身も心も解放されたような時間が、二人の
間にゆっくりと流れていた。

私の異変に、最初に気が付いたのは娘だった。居間に飾ってある花を見て、「来客があったの？」と訝しげな表情で私に聞いた。花は妻の趣味で、入院直前まで我が家で欠かしたことはなかった。あれ以来暫く我が家には花の姿は見られなかった。来客用に使っているグラスやコーヒ・カップの位置も、微妙に変化していることを娘は既に気が付いていたようだ。それに、家の中が昔のように整理され、今では男のやもめ暮らしの侘しさがすっかり消えていた。

「客も時には来るよ」と返事したが、その客の姿は娘にもはっきり見えてないようだった。

「パパが明るくなるのは何よりよ」と深く詮索しないで料理に取りかかった。いずれは娘にも話すつもりだが、それは今夜ではなかった。ただ、娘が変化の兆しを承知していれば、話し易い環境は整った事にはなる。娘にはいずれ全てを話すことになるのだろう。

娘たちは、最近では決まりごとのように土曜日の夕方から一家で来るようになった。年上の娘が家庭を仕切っていて、亭主は、性格はいいが影が薄いようで、私から見れば男として少々物足りなく思える。それでも娘一家が旨くいってあれば私が口を挟む必要はない。建材メーカーのサラリーマンだが、娘の弁では会社で活躍しているそうだ。人は見掛けに依らないのかもしれない。ただ娘の父親は、娘婿に対して要求が過大になるのは世の常なのだろう。

娘のお腹が最近少し膨らんだようだが、娘は何も言わないでいる。単に肥っただけなのかもしれない。何処にでもある、平凡だが仕合せな夕食の風景が、何時ものように今夜も繰り広げられていた。私にとって、週に一度のささやかな楽しみだった。娘たちが帰る準備をしている時、私の携帯が鳴った。壁の時計を見ると八時過ぎで、娘たちのいつも帰る時刻だった。引退後の私の

携帯に電話してくる人は限られている。電話に出してみると思った通り彼女からだった。「突然ですが、今夜いらっしやいませんか？」と思いがけない誘いだった。土曜日は娘の家族が来ることを彼女は知っていたし、今までこの日に誘われたことはなかった。玄関に向かう娘を意識して、私は事務的に「わかりました」と応えて携帯を切った。「誰からなの、来週は何食べる？」という娘に、「お前には関係ない」と手を横に振り、「任せる」と何時もの様に返事して彼女を送り出した。本格的に肌寒くなった時期で、マフラーを用意してから車呼んだ。「娘たちが丁度帰るところだったので、今から出ます」と車を待つ間に彼女に電話した。彼女は明るい声で「良かった」と短い返事だった。

どういう風の吹き廻しにせよ、彼女からの誘いは嬉しかった。彼女の家で回復した私の

男の能力は、その後順調で少なくとも週に一度程度の頻度で彼女と会う時は、その後充分に役目を果たしていた。

私にとって新しい充実した生活が始まったと言えるが、この充実感は永続性があるのか疑問でもあった。永い人生の経験からも、突然降って湧いたような幸せには一過性のことが多く、その喜びの期間は直ぐに消えていくことが殆どだった。社会的成功に縁の無かった男の人生観で、何事にも否定的な面を見る習性が身に付いていた。

ただ、還暦を過ぎた感性には何事にも驚かなくなつた強みが生じていた。気弱な初老の男にも、それなりの心構えはあつたと言えるだろう。先も後も考えず、ありの儘に身を任せるのが半ば習慣となつていたようだ。今は彼女の喜ぶ姿を見るだけで充分だった。例えばそれが今宵限りだとしても。

玄関で私を迎えた彼女の首元からは今まで

経験したことの無い香りが漂っていて、私の雄の部分を十分に刺激した。その香りだけからでも私の期待は高まった。

彼女の海外生活は、多彩な香に対する感性も高めたようで、訪ねる度に違った匂いがそれぞれの特徴を醸し出していた。

最初の訪問時に開けて、まだボトル半分近く残っているバレンタイン二十五年物が居間のテーブルに用意してあった。その時の気分が、ブランドーや他の酒を飲むこともあった。だが、バレンタインの減った量は我々のデートの記録でもあった。

「突然お呼びたてして、御免なさい。今夜は何故だか急に貴方が欲しくなったの」

彼女のストレートな告白に驚いたが、それは又嬉しい驚きでもあった。胸のときめく時代は既に過去のものだと思いついていた自分に、彼女の正直な物言いはそのときめきを蘇らせてくれた。これは花火が消える前の一瞬の輝きなのだろうか。この今の輝きが最後の

光だとしても、私はその一瞬に恵まれたことを感謝した。それに彼女の直接的な物言いが、私達の新しく始まった絆の存在を感じさせた。

永い歴史を持つ夫婦では、互いに知り尽くした安心感がある一方、新鮮さは時の経過に比例して当然失せてくる。知り合って間の無い男女には年齢に関わらず未知な部分が多くあつて、それが互いの新しいものを見付け出す際の好奇心を刺激している。知り尽くした安定感とは老境に入った夫婦には必要であつても、心を躍らせるものはあまり残ってない。また、そういうものを求めなくなる年代でもある。私達はそれを年相応の分別と呼んでいますが、人によつては退屈と思うこともあるだろう。

互いに伴侶を失くし、まだ肉体的にも精神的にも現役を務められる老境の人達も、社会の暗黙の了解として手を出さない分野があることは判っている。それを制約と感じないで

守っている人も多数いることだろう。外部からの圧力を押しつける気力も失くしていると言った方が正しいのかもしれない。特に下半身の問題は、少々のことがあっても手を出さない方が無難で、それが大人の思慮深い判断だと決めつけている風潮がある。

互いに孫のいる年齢で異性に魅かれ合うのは、世間の目はいざ知らず、当事者にとってはそれなりの理由があるとしか言えない。世間体を気にする小心な私は、自分なりの辻褄合わせで言い訳するしかないが、何のためらいも後悔も既に無くなっていた。言い古された言葉だが、第二の青春が始まったと言う表現が私の心情をよく表しているようだった。

寒くなつた時期にも関わらず、彼女の住まいは外の季節とは隔離された空間を生み出していた。居間も寝室も、そして風呂場にも季節感はなく、薄着でも快適そのものの室温を保っていた。

ジャグジーでの戯れは、後に控える本舞台

への導入となり、今では二人に欠かせないものとなっていた。彼女の告白によると持てあました身体を、夜ジャグジーの奔流で度々慰めていたらしい。アメリカでのアダルト向けテレビ番組が、女性たちの密かな遊びを紹介していて、それがヒントになったと説明してくれた。

「女性にとっても、切実なんですーと真顔で言う彼女に生々しい女を感じた。

低めの温度に保たれたジャグジーは少々長く入って戯れていても身体への負担は無く、彼女は独り慰めていた時の様子も見せてくれた。その絵は妖艶であったが、私には愛おしくも思えた。そんな寂しい孤独な営みを彼女は五年間も続けていたことになる。内在する欲求は本当の喜びを極めた女性には、代理で満たされるものでもないのだろう。他にも方法が幾つかあったと彼女は笑って説明したが、おおよその見当は付く。家族を含めた世間を気にし、行動を制限されていた為、殻に

籠り自分で処理せざるを得なかったのだらう。夫を失くした女盛りの女性たちが、同じ思いで大半は本当に求めるものを諦めているのだと想像出来る。男性と比べれば女性のその方面での解消に世間は関心を払ってなかった。

その五年間の鬱積した思いが爆発したと考えば、彼女の強烈な反応は充分理解するこ
とが出来た。彼女は残り火ではなく、極めて
活性度の高いマグマを内に秘めていたこと
なる。死火山でも休火山でもなかった。私の
男の活力も彼女のお陰で見事に甦った。
私たちには、世間体よりもっと二人にとつ
て大事なものが見つかったと思えば、慣習か
ら来る少々の制約は気にならなかった。
何の縛りも無い自由な空間で、奔放な二人
だけの舞台はその夜も果てしなく続けられ
た。

私は最近、不思議な性（さが）が身に付いているのに気が付いている。彼女とのいろいろな出来事を、亡き妻に毎度寝る前に報告する習慣がいつの間にか出来上がっていた。それは全面的に信頼し、依存している母親に、何でも打ち明ける子供のような光景だったが、勿論母親にあたる妻の姿はない。会話も無く心の中で一方的に話しかけるだけで、返事は期待出来ない。最初は新しく出来た恋人を亡き妻に対して申し訳ないと思う贖罪からの報告だったと、自分でも意識していた。

新しい恋人が出来て毎日の生活が充実している筈なのに、私は妻にまだ依存していることを知らされた。夫婦として一緒になって、四十年近くの年月で培った絆は簡単に切れるものではないのだろう。私たちは身内という表現を何気なく使っているが、長く生活を共にした夫婦は正に身内としか言いようがない。自分の分身になった妻は、例え現世から消えたとしても分身の役目をしっかりと守り、

私の話を黙って聞いている。この感覚は私だけが持つ特別なものなのだろうか。

新しい恋人が出来た時、「お好きなように」と言った妻は確かに私の創造した分身に違いなかったが、彼女は私の中に未だに存在している。妻に対して後ろめたい思いがある時、特に分身の妻は私に必要だった。「君なら分かってくれるだろう」という甘えが常にあった。許しを乞う相手は私にとって大事で、無言の会話の儀式は私の心の安定を保つ為に必要だった。信頼する誰かが自分を見守ってくれている、という意識が私を孤独にさせないでいた。人は孤独に耐えられないのだから。カトリック信者の懺悔も、常時見守っている神の存在があつて始めて成り立つ儀式ではないだろうか。もしかしたら、この解釈は無宗教の単に気の弱い男の言い訳なのかもしれない。だが、私にはやはりこの言い訳が必要だった。男が生物として女と比べてひ弱なのは、このメンタリテイに依るのだろう。

動物として生きる逞しさに欠ける男には、何か言い訳（理由）が必要なのだ。生活の基盤を共有しない互いに独立したカップルは、二人のための日常的雑事から解放されていて、自分の都合がいい時や必要な時に会っていればいいだけだ。まして、互いが経済的な問題を抱えていない限り、優雅な選択だけでことは足りた。私たちの場合、月に何度かの外食・観劇等の出費は、私や彼女の資産から考えれば大きな負担ではなかった。私たちはよそ行きの服装と物腰で、生活感の無い男女を演じていただけのようにだ。将来の夢も、現在抱える不安も無かった。子供や孫の行く末はそれぞれに関心事ではあっても、問題を共有するものではなかった。夫婦関係同様な営みが週に一度程度あるが、それは断じて地に足の着いた夫婦のものではなかった。

強いて表現すれば、彼女は私にとって高級レストランのご馳走で、妻は家庭料理となる

だろう。華やかさや、高い食材とは縁が無いものの、妻は永続性のある安らぎという食事を私に与えていた。大人の優雅なお付き合いとして考えれば、今の私たちは或いは理想的な姿とも言えようが、それは妻に求めるものとは根本的に違ったものだ。

もしかしたら若者との違いは、経験からのみ導かれる結論を老境の私たちは既に分かっている点だろう。若き日の衝動を今経験出来ても、それによって若き日の無謀な挑戦を大人は選ばないものだ。経験によって知ることや分かることは、私たちの可能性を否定する原因にもなっている。老人が若者になれないのはそのためだろう。

人は年代によってそれぞれの役目があり、その年代に相応しい選択しか普通出来ない。無知で一途だった頃の若者には、言われていた様に無限の可能性があるのだろう。しかし人生を一通り経験した男と女には、若者には無い選択肢が当然あった。

考えてみれば、私の今の境遇は恵まれてい
ると言えるだろう。私の年代にとっての将来
とはせいぜい五年、十年という時間の規模で
しか残っておらず、まして男の役目を考えれ
ば若者に与えられた将来とはその長さが決定
的に違う。そんな私が極めて魅力的な女性と
親しくなれ、なおかつ男の能力まで取り戻せ
たのは、残り少ない時間での挑戦としては充
分過ぎる成果だろう。しかも殆ど努力もせず
全てが手に入った。
また、老人の姿に寂寞とした諦観が漂うの
は、生物としての絶対寿命があるのを分かっ
ているせいではなかろうか。この年齢では、
何事をやるにも年相応の役目しか出来ないこ
とを、彼等は何時とも思い知らされているから
だ。私も例外ではなく、この幸せな時間がい
つまでも続くとは思っていない。
亡き妻にまで継いで孤独を避けようとして
いるのは、独り暮らしの心の闇を一瞬といえ
ども覗いたからに違いない。新しい彼女への

傾倒は多分私の逃避行動が主な原因なのだろう。私にはどうしても縋りつくものが必要だった。

彼女が、どういう心境で私と会い続けているのか確かめたことはないが、置かれた環境から充分推測出来るものはある。もし肉体的欲求の解消が目的であれば、少しばかりの小遣い賃程度で相手をしてくれる若い男は探せば幾らでもいるだろう。また、彼女ほどの魅力を備えた女性なら、その気になれば言い寄って来る男は居たに違いない。それでも彼女は夫の死後、五年間も男無しで過ごした。男性とは生理的欲求のメカニズムが違うとはいえ、まだ彼女の歳では旺盛な欲望を秘めているのも事実だろう。

私は単に、この幸せは出会いがもたらしてくれた結果だと捉えていた。人生にはいろいろな出会いがあり、同じ様に別れもある。それぞれは殆ど偶然の産物であったとしても、人は時として出会いに運命的なものを感じる

ことがある。その出会いが後に運命的な必然の位置を確保するのは、その機会を互いに活かしたかどうかの違いだろう。チャンスはあっても逃すことは幾らでもある。

私が孫娘の授業参観に出なかつたら、娘が気を利かせて私に頼まなかつたら、と考えれば、私たちの出会いはやはり何かに導かれていたと信じてもおかしくはない。当事者には二人が結ばれた偶然を、何か意味あるものに変えたい願望は常にある。また、前にも感じたことだが、あまり旨く行き過ぎると不安になるのも事実だった。

仕事から引退して余生を送る身にも、人生は様々な模様を紡いでくれる。

身体を重ねる毎に互いの好みや癖を知るこ
とになる。若い時と違って、営み自体に舞い
上がることはないが、その都度新しい発見は
ある。それぞれの男女が時を重ねて創り上げ
た段取りと形とでも言うしかない。数少ない
女性遍歴からでも、多彩な個性（くせ）を知
ることはあった。

若い時代に比較的長く関係の続いたクラブ
のママは、何時も和服で日本的な美人だった
が、彼女は独特な感性と習性を持っていた。
見掛けは大人しい印象にもかかわらず、芯は
強い女性だった。私より五歳程年上で、離婚
を期に水商売を始めたそうだ。自分の過去に
ついては多くを語ることはなく、その持ち物
や趣味から、かなりの暮らしをしていたこと
が推測出来た。それに、文学に関する知識は
並々ならぬものがあり、一度だけ彼女が書い
た散文詩みたいなものを読ませて貰ったこと
がある。感想を聞かれても、二十代半ばだっ

た私には適切な評価も出来ず、「いいです
ね」と言うのがやっとだった。
彼女を目当てに来る客は多かった筈だが、
出会いから間も無く私達は男女の仲になっ
ていた。今考えても、入社三年目の、一介のサ
ラリーマンに過ぎない私を選んだ理由が良く
分からない。確かに仕事は出来たし、若いの
にも関わらず安くない彼女の店に顧客をしば
しば同行した事実があった。売り上げだけ
基準なら他に幾らでも貢献した客は居たし、
私が連れて行った客には一流会社の部長クラ
スも多数居た。売り上げや社会的地位を男に
求めていなかったのは事実だ。
驚いたのは彼女の男に対する眼力の確かさ
だった。
私が連れて行った客に対して、「あの人に
は裏がある」、「酒の飲み方が汚い」等々の
言葉で語られた評価は、後になって納得いく
事実が幾つも出てきた。若くて一途な時代に
は人の持つ裏側を窺い知ることには少ないし、

まして最初から身構えて付き合う訳でもない。人間誰しも、気を許した場所での振る舞いから、お里が知れることは多々あるだろう。特に酒が入ると人は本性を表す傾向がある。

彼女の助言から、酒の飲み方を教わることも確かにあった。もし、私に当時何か特長があったとすれば、若さと素直さ位だっただろう。

彼女が一度私に「若いのにも関わらず、酒の飲み方に大人の風格がある」、と言ったことがある。結婚前のことだが、今思えば彼女の思い違いだったのだろう。私は風格のある大人に成れた自信は無い。

当時既に何人かの女性経験はあった。いずれも勢いに任せての遊び程度で、ただ欲望を爆発させていただけだった。酒の飲み方も女性の扱いも共に初心者で、年上の女性に教えて貰うことの方が多かった。彼女との関係はその典型で、男女の営みは欲望の充足だけで

はなく、もっと奥があることを私に教えてくれた。男として見栄は張っていても、男女のことに関し本当は未熟な若者にしか過ぎなかった私には、確かに彼女から学ぶことが多いかった。

彼女の評判が良かったのは、会社や社会での地位には無関係に、客に分け隔てなく接する一貫した態度だった。店によつては常連の上司が連れて来た部下には、碌な扱いをしないうことも珍しくなかった。客の名前は一度で覚え、久し振りに訪れる客を感激させた。接客業の基本を彼女は分かっていたようで、誰にも誠実に対応していた。そんな彼女だったが、夜の営みにも彼女独特のスタイルがあった。「人は発情した動物とは違う」というのが持論で、女性に接する時の心構えを私に指南した。

「若い人はどうしても焦りがちだが、女は男と違うことを分かってね」と最初のお手合わせの時注文を受けた。自分なりに分かった

つもりでいたが、彼女の様々な指摘は良く理解出来た。思うに若い私を調教しようとしたのだろう。

女性がその気になって男性を受け入れるまでには時間を掛けたプロセスが必要なことを彼女は強調した。若い男の激情に任せた営みは単に発情した雄の行動で、それでは女性を喜ばせることは出来ないという説明だった。

本能の赴くままに振る舞っていた私には年上の女性の具体的な指摘は勉強になったし、実践上の参考にもなった。

「女性はスイッチが入るまでに時間が掛り、その後も気持が徐々に燃え上がる必要があるの」と彼女は女性の生理的メカニズムを説明してくれた。男性の直線的で単純な放出作業とは根本的に違うものだった。食事をしたり、酒を酌み交わして会話したりしている時にも、女性は山頂を目指して少しずつ歩き始めているそうだ。そのプロセスが女性には大事で、多少の個人差があつたとしてもムー

ド作りに欠ける男性には魅かれないとのことだった。そして何より、男の容姿の端麗さや立ち振る舞いの品性に拘っていた。「美しく感じない男性には、私は魅かれないし抱かれたいとも思わない」と本音を漏らしていた。「一時には瞬間的に燃え上がることもあるけど、女性にはそんなケースは例外よ」と付け加えた。彼女はまた別の機会に「男は頭で考え、女は身体が判断して答えを出すの」とも言ったことがある。

確かに男の創った社会は全てに合理的説明のつく理論構成が背後にある。我々はそれを人間の英知が創造した文明の証だと捉えている。だが、彼女によれば女にはそんな判断基準は基本的には無いそうだ。女性が守るのは自分の子供と自分自身で、国のために戦うとか、主義のために命を投げ出すという考えを女性はしないという。次の世代の命を育むという、大事な役割を担っている女性に神は余計な負担を掛けなかったのだろう。

女性が現実的な判断を優先し、観念的なことにはあまり気を遣わないのは、生まれつきの役割の違いだと理解すれば納得がゆく。女性が、夫との死別位で揺らぐことがないのはそのためだろう。彼女が教えてくれた女性の実像は、人生を経験した今にして思えば分かることが多い。

彼女の発言で未だに忘れられないのは「男女の営みで絶頂を感じる度に、生きている実感を感じて身体が認識する」という変わった表現だった。この発言は彼女の正直な感想だったのだろう。あからさまにしないことが女性の美德とされていた時代にも彼女の知性は、或いは的確に女の本質を語っていたのかもしれない。かかった。

営みの際、積極的に取り組む彼女に当初戸惑いを覚えることもあったが、女性の奥深さを知るに付け納得することが出て来た。そんな彼女は私の持ち物に異常な興味を示し、私が寝ている時にも私の物を口にすることが

度々あった。その行為は私への奉仕と言うより、自分の内なる衝動を高める為の儀式だったようだ。驚いたことに彼女は私の物を口にしたまま絶頂に至ることもあった。

何時も和服で端正な姿を誇示しているような存在の女性と、ものに憑かれた如く私のものを頬ばる女性との間には普通の目には大變な落差があるように映った。彼女の奔放な振る舞いに私が戸惑いや違和感を覚えたのは、私の女性に対する先入観のなせるわざだったのだと後に知るに至った。当時の彼女は「男性の象徴に力と美を感じるのー」と言って熱心に私の物を、時間を掛けて口で慈しんでいた。それは今思い出しても、身震いするほどの妖艶な姿だった。

この歳での感想としては、当時の私は単に未熟な若者だったと言うしかない。彼女は自由、自然に自分の求めるものに没頭していたに過ぎなかったのだろう。私はいいい指南役に恵まれたと感謝すべきなのだ。

女性が理論立てて考えない習性は、我が人生で後に思い当たることが幾つか出て来た。若い時期に、女性の本質を指摘してくれた彼女の慧眼には今となっては感服するだけだ。

そう言えば、かのナポレオンも「閣下が尊敬する女性は？」と問われた時、「沢山子供を産んだ人」と答えている。

女性を軽んじている訳ではなく、生物としての女性の大事な役割を彼女とナポレオンは私に教えてくれたようだ。

それぞれの過去の歴史を持ちながら、私達の新しい歴史は創られていた。生活は共にしないが、お互いが必要な存在になっていた。音楽を語り、人生を語り、食事を共にしながら楽しい時を過ごすことは出来た。ただ、唯一語られなかったのが二人の将来についてだった。

それでも会う度に味わえる悦楽は何ものにも代え難く、時間を掛けて互いに追求した。彼女に依れば、子育てが終わった頃から感じる方に深みが増し、到達する地点に変化が出て来たと言う。四十代で新たな境地まで達したと思っていたのが、さらなる先があることに最近気付かされたそうだ。空白の五年間は独りで慰めていたものの、それはあくまで空腹を満たすおやつに過ぎなかったと彼女は表現した。何よりのご馳走は空腹時の食事と言われている。長い飢餓感の後の営みはよりインパクトが強かったと取るべきだろう。

男の単純な放出のメカニズムとは違った仕

組みが女性には備わっているようだ。

アメリカでの七年間に及んだ生活は彼女の目を開かせるには十分な時間だったし、また彼女の年齢からしてもいい勉強の時期だったという。当然女の喜びには目覚めていたものの、彼地の女性の積極的な参加と正直な反応には学ぶものがあつたと述懐した。男女の営みは何ら忌諱するものでもなく、隠すものでもないという心境に至つたらしい。それまで全て受け身だつた姿勢が、意識して自から積極的に取り組むようになったそうだ。

「あの期間が無かつたら、私は静かな未亡人の人生をずっと歩んでいたでしょう」と感慨深く呟いた。

彼女も夫をガンで失くしていた。体調が悪いと訴えていたが、体重の変化が無かつたため、本人も家族もガンは全く疑つてなかつたそうだ。気軽な健康診断のつもりが余命一年の死の宣告となり、医者の見立ては結果として一カ月程度の誤差だったらしい。手術の出

来ない肝臓のガンで、患者本人を前にした短い余命の診断告知に彼女は大いに疑問を持ったという。

あからさまに語られないところに、本質が隠されていることが多々ある。夫が亡くなった時彼女は四十台の後半で、正に女盛りと言える年頃だと自分でも自覚していた。思いやりのある夫で、そんな彼女に自分が居なくなつた後の心配までしてくれたそうだ。

「いい人に出会えたら遠慮要らないよ。逆のケースだったら俺も女性を求めるだろう」と、末期にも関わらず笑って勧めてくれたそうだ。

身体の疼きと自分の精神的葛藤の狭間で五年という時間が過ぎたが、私との出会いがたまたま決断の潮時だったのかもしれない。実行に移すまでの逡巡は良く分かる。未亡人に課せられた世間の暗黙の掟は、不条理で決して本人の意のままにならないことがある。伝統・社会習慣・良識等々で創り上げられたあ

るべき妻の姿には、肝心な本人の欲望と意向が無視されている。彼女も見えぬ制約の壁のため、五年という短くない時間を独りで慰めていた。多分出会いの無いままに残りの人生を過ごす未亡人は多数居ることだろう。本人の選択ならいざ知らず、もし世間の空気という実態の無い無言の圧力が原因なら問題だ。ただ、この問題には対応策や正解が見えないことも確かだ。彼女も私も自分で選択し、結論を出したと言うしかないが、世間の評価はともあれ互いに当事者がその結論を良い判断だと思っているのは間違いなかった。人には学習や社会の習慣で色々な刷り込みがなされる。誰も触れないことには、黙っているのが無難だ。まして、自分で慰めることを覚えた下半身の問題は、人に言われぬ後ろめたさもあり、公に語られることはあまりない。人間の発情を劣情と捉え、社会の良識はその劣情を否定してきた。特に女性の性欲に

関して世間は寛大ではなかった。

食欲と共に動物に与えられた種の保存のため
の本能は、本来大事な役目を担っている筈
だ。そして誰もがその本能から逃れられない
のは、強烈な快感を伴う結果がその都度待っ
ているからだろう。年頃になれば自然に覚え
る自分で慰める行為は、性科学者の調査によ
れば健康な男女なら殆ど経験するし、自分の
意志の力だけでは普通止めることは出来ない
という。又それは、成熟した大人として本番
に臨む準備行為だともいう。

更に性科学者は、女性の到達する快感の度
合いは男性を遥かに凌ぐ事実も指摘してい
た。脳波、呼吸、脈拍、血圧等の変化の割合
から導き出された男女差は歴然としているら
しい。営みの際の女性の反応から、その事実
は医学的分析には縁が無い素人でも充分に推
測出来る。

お互いに分かっているにもかかわらず、暗黙の了解は人
しないものが世間にはある。

の世に沢山あるものだ。そういった約束ごとや、未亡人に求められている自制にも彼女は拘ってなかった。私達は慣習に盾つく確信犯であり、もつと言えれば罪の意識の無い共犯者だった。

特に彼女は世間のしがらみの為に自分の欲望を抑えようとは思っていなかった。私達の場合、無秩序で勝手な行為ではなく、大人の判断による選択だった。少なくとも誰かに迷惑を掛けてないし、誰かの生活を破壊している訳でもなかった。

それぞれに子供や孫が居て、残された遺産は彼らの最大関心事であるのは世の常としても、私たちの人生は子孫に幾ばくかの資産を残すのが目的ではない筈だ。残してやれば彼等から感謝され、幾らかの敬意も払って貰えるかもしれない。人によって選択は様々であろう。子孫繁栄の気持ちは大事でも、私の価値観では残すことが最優先ではなかった。

サラリーマンの道を選んだ時から、私には

継ぐべき家業も無かったし、職業柄継がせるべき家業も創れなかった。また、何代も続く格式を誇るような家柄でもなかった。束縛の無い身には、自由な選択という何物にも代えがたい生き方があったのみだ。何処の馬の骨か分からない人達だけが知る自由な世界なのだろう。

結果として、他人からは小市民的な生き方に映っても、自分が負け犬だと思ったことはなかった。

私たちの場合、世間の目より子供たちが二人の関係をどう思うか、ということだけが強いて言えば気掛かりだった。だが、私の娘が反対することは考えられなかった。もし娘が何か言うとなれば、せいぜい「旨くやってね。ただ私にも少し残しておいてよ」と言うくらいだろう。

互いに親しくなっても、自ずと相手の領域を侵さないマナーが二人には出来上がっていた。或いはその姿勢は年配者の節度とも言えただろう。今から、長い人生を将来に向けて共に築くわけではなかった。私たちには相手を束縛しない気遣いや、年齢に相応しい配慮があっただけだ。

ただ、営みの時は食欲だった。濃厚な時間を掛けた愛撫は、残り火を燃え上がらせるには互いに必要だった。加齢から来る感覚の鈍りは私の持続時間を長引かせ、その間の彼女の丁寧な口での愛撫で絶頂近くを何時までも彷徨えた。急激に駆け登り、すぐに爆発していた若い頃には決して味わえない境地だった。異性を知り尽くした男女の攻防は、本来の生殖行為とは遥かにかげ離れた異次元のドラマを毎回展開していた。頻度に拘る年齢ではなかったが、密度は毎回濃かった。特に彼女の反応は壮絶とも表現出来る領域に達していた。

女性の感度は年齢と共に変化があり、明らかな差があることを彼女は教えてくれた。与えられた本性に素直に従い、いわれなき束縛から自分を解放したからだとも彼女は説明した。「生きる喜びを感じる」と訴えるような口調で私に告白する様は、私の残り火を掻き立てる役目を果たしていた。これに似た感想は若い頃にも、当時相手してくれた女性から聞いた覚えがある。

私たちは全ての面で相性が良かったのだろう。そして中身の実態は、どう見ても「老いるらくの恋」とか、「茶飲み友達」という程度で済まされる、生易しいものではなかったようだ。

つい最近まで落ち込んでいた自分が、信じられないような舞台の主役になっていた。伴侶を失くした喪失感はまだに残ってはいるものの私の生活は、もう鬱陶しい空気に覆われてはいなかった。少なくとも毎日を暗い気持ちで過ごす必要は無くなっていた。精神的に

は楽になり、そんな自分が亡き妻に申し訳ないという気持ちも幾らか残ってはいた。それでも現実には長い過去の生活と、そこで生まれた絆やしらがらみを吹き飛ばすほどのパワーを持った本能が根柢で支配していた。それを肯定すべきか否定すべきかの選択は、今の私にとって正に生き方の集大成だろうが、私は人としてのあり方を考える前に本能に従っていた。楽な方へ逃げる習性が身に沁み付いていたのだらう。幾らかの後ろめたさはあっても現在の彼女との関係を自ら放棄する考えは全く無かった。

どんな理屈を付け、美化したとしても男女の結びつきは根柢に性衝動があるのは否定出来ない。又それは決して醜いものではない。動物としての宿命から人間といえども逃れられないものがある。

ある私大の教授が結婚を定義して、「長期安定した性生活の確保」といった主旨の持論を公共放送のテレビで述べていた。表現に受

け入れ難いと感じる向きもあるだろうが、結婚の本質は彼の言う通りだろう。男女に性の衝動と快感が無ければ、結婚と言う仕組みそのものも成り立たないかもしれない。

適齢期での生殖活動を終えた後でも人は男女の営みを続けていて、むしろ生殖に直結しない営みの方が圧倒的に回数としては多い。三百六十五日発情出来るホモ・サピエンスのみに可能な業だ。後天的に得た価値観はDN Aに刻まれた本能の指令にはなかなか勝てないものだ。

私は自分の行動を正当化するため色々な理由を考えていた。だが、相手の彼女はそんな私の考えるような理屈には全く拘っていないかった。男と女の違いだろう。

彼女の下腹部の毛が少なくなっていたのは当初から気が付いていたが、今では全くの無毛状態になっていた。毛根の跡も消え、カミソリで処理した跡も見られなかった。

聞けば行きつけの美容サロンで永久脱毛の処置を受けたらしい。アメリカでの生活で彼の地の女性たちが当時でも然るべき処理をしていたのは、衛生上の問題と営みの際の習慣の違いから来ていた。口での相互愛撫には確かに邪魔で、特に体質的に下腹部の毛が多い白人女性は大人のたしなみとして剃毛が既に市民権を得ていたようだ。ピューリタンの多いアメリカでは、性の解放が行き渡るには北欧より時間が掛ったようだが、彼女が滞在した頃には口を使うことは男女の普通の行為としてタブー視されてなかったそうだ。彼女も夫の勧めでその習慣に従ったらしいが、夫の死後は手入れも怠っていたと事情を打ち明けた。彼女は私に対する礼儀として思い切って永久脱毛を選択したと言う。ただ、温泉やサウナに行った時無毛で裸身を晒す勇気がまだないと笑っていた。確かに時間を掛けて行う口での愛撫には都合が良かった。遮るものが無くなり視界が開

けた秘部の微妙に変化し収縮する様は、彼女の興奮の状態を直に伝えてくれ、男の本能をいたく刺激した。

（続く）

定年退職後の生活に、会社を辞める前はあ
たかも人生の楽園みたいな思いを持ったこと
がある。毎日の義務から解放され、何か意義
あることをやり終えた満足感が残るのだろう
と想像していたが、自分がその立場になって
みると実感したのは目的を失くした敗残者の
様な感慨だった。働き蜂がその役目を解かれ
た時、実はもう貢献出来ることは何も残って
いなかった。つまり生き甲斐を失くしたのも
同然の現実が待っていた。
社会生活を営んでいて、自分の意義ある活
動をする場所が無いことの寂しさは、経験し
てみないと実感が湧かない。現役時代、会社
組織のあり方に色々批判があっても、そこか
ら離れるとまったく価値のある生活が待ってい
る訳でもなかった。余生に、もっと言えば人
生に取り組む姿勢に確たる方針や計画が無か
ったせいだろう。私のこんな会社人生を、も
しかしたら働き蜂と言うのかもしれないと思
った。

一流と言われている企業に勤務し、世間からエリートと称された経歴の空しさが身に沁みるようになっていた。自分は何をやったのだろうかという疑問が常に付きまとい、結論としては会社や社会の歯車の一部にしか過ぎなかったことを思い知らされた。自分でなくてはやれなかったことなど何も無かった。営業成績を上げ、何がしかの給料とボーナスを貰っても、目に見えて社会に貢献したという思いは湧かなかつた。

ただ、やったことは結婚して子供を育て、そして気が付いたら妻を亡くしていた。確かに経済的基盤は会社勤めで手にしたが、それだけのことだった。何千人と居る組織の一員であれば、個人が埋没するのは仕方ないことなのだろう。同期だけでも百人以上は居た。今となれば張り切って入社した当時がやたら懐かしい。

過ぎてみて分かることは多くある。人は平等だと信じ込んで社会に出たが、社内でも、

また取引先との関係でも、人は平等などといった青臭い議論は誰もしなかった。いつの間にか自分の意識の中でも「本来あるべき姿」という類の命題は消えていた。現実は一切に優先し、学生時代の拘りはすぐに消滅していた。

「現実には甘くない」という言葉が一番説得力を持ち、「上司」や「顧客」という無理が道理を引っ込めていた。入社した時代には「猛烈社員」という言葉が流行り、優秀な営業マンであれば、家庭の平凡な幸せなどと口にする者は居なかった。

今落ち着いて振り返ってみても、何かしらやることがあったのが生き甲斐となっていたようだ。さして取り柄の無い人間が生きるというのはそういうことなのかもしれない。これは、何処にもある熟年の総括なのだろ。或いは、やることが無くなった年配者に多く出てくる鬱の症状かもしれない。

こういった日常の営みに、突然四十年近く

連れ添った妻が亡くなるという出来事が加われば、生活の安定や安らぎは何処にも見出すことは出来なくなる。

そんな折の孫娘の授業参観は、結果として私の残り人生の可能性を拓ける重大な契機となった。熟年の男女が親しくなったのは、人生観や生きる理念に共鳴した訳ではない。もつと根源的な、男女が魅かれ合う自然の摂理だとしか説明が付かないだろう。その摂理の根源には、寂しさから逃れるという精神的な理由と、いまだ残っていた男女の旺盛な性に対する肉体的な欲望があった。

私たちは互いが、正直にそして素直に自分の弱さを自覚し本能に従った。世間や人の評価は二人にとってどうでもよかった。互いに生きる心の支えと肉の喜びを求めていた。

私の本音では目先の何かに縋りたかった。縋るものが欲しかったというのが適切だったかもしれない。人は孤独には耐えることが出来ないものだ。特に男の場合その傾向が強い

ようだ。私達の組み合わせは、傷ついた二人が求めあった結果だとしか言い様がない。それは過去のしがらみを、すっかり背負った男が生き甲斐を模索した結果だった。地方出身の人間には、生まれ故郷は何時までもホーム・タウン（生家）として存在する。個人差もあるのだろうが、学生時代から結婚後も含め引越しの多かった私には、それぞれの住まいは仮の宿といった認識が常に付き纏っていた。

数十年の時を共に過ごした夫婦には、伴侶が亡くなっても相手は生れ故郷と同じように何時までも存在するようだ。そういった意味では、私には今の彼女は新居だった。仮の住まいでも私にとっては快適で、互いに潜在的本能に従って自ら求めたものだった。私達は神から与えられたものを最大限に享受しているという、いい訳を考えていた。何でも意味付けしようとする、男の宿命から私は逃れられないようだった。本当は、気の小

さい男のいつもの弁解なのだろう
知り合って半年以上経つのに、私達が生活
を共にしようとしなれないには理由があった。
普通、男女が一緒に生活を始めると日常の些
細なことで必ず軋轢が生じ、当初熱烈な恋愛
関係でスタートしていても問題が発生する。
熱は急激に上がったものほど早く醒め易いも
のだ。今保っている距離がお互いに快適だと
分っていた。そういった判断の上で選んだ二
人のライフ・スタイルだった。
一通りの人生を経験し、なおかつ性の奥義
を覗いてきた男女には、相手を見る目に余裕
があった。それに自分の置かれた現在の立場
を冷静に判断する大人の知恵とゆとりもあつ
た。
「通い婚」と彼女は笑っていたが、どちら
が通うにせよ二人の選択は正しかったと言え
よう。若者ほどの一途な思いは無いが、大人
の分別は充分備わっていた。特に私の場合、
亡くなった妻の空気は私の家では随所に消え

ないでまだ残っていた。時として、彼女と一夜を共にして自宅に帰ると、仏壇の写真は「浮気してきたでしょう」と言っている様に思えることがあった。

現実には繰り広げられている事柄が、思い起こせば危うい偶然の結果である場合が多い。日頃の細やかな気遣いや洗練された物腰から判断しても、彼女は女性としては文句の付けようのない存在だった。高い教養と知性は彼女の容貌と相まって際立った存在感を示していた。冷たい印象ではないのだが、どちらかと言えば整い過ぎていて近寄り難い女性に見えた。今にして思えばよく私を受け入れてくれたものだ、自分の無謀とも思える積極的な行動に冷や汗が出る。これも出会いなのだろう。

本来なら私にとって高値の花であるような彼女が、私と男女の仲になったのも偶然のもたらす悪戯としか形容のしようが無い。運命

の僥倖をただ喜ぶべきなのだろう。個人の人生には一生を通して定まった行方は何も無い。私達はその都度判断し選択をしている。特に相手がある場合、自分の思い通りに行かないことの方が多いだろう。それでも、男女が何かをきっかけに知り合うチャンスは幾らでもある。その中から恋人が出来、妻や夫となる人が決まって来る。お互いを駆り立てる何かを相手を恋人として受け入れ、その延長線上で最終的に伴侶としての選択をしている。若い時代に大人の判断力が備わっている人は稀だろう。青年の未熟な選択はむしろ当たり前だと後に悟ることになる。若い男女を結びつける原動力は、動物としての本能に勝るものは無いようだ。又、その衝動が無ければ人は結婚しないのかもしれない。そして老齢期に入った今でも、やはり人を動かす原点は本能の指令だという事実を認めざるを得ないようだ。本能とは性の衝動に他ならない。

労働や子育てといった義務から解放されて
いる私たちには、互いに幾ばくかの築いた資
産があり、生活する上での経済的心配は無か
った。共に同じ屋根の下で暮らさなくても毎
日電話での会話があり、必要とあれば何時で
も会えた。ただ、週に一度程度共にするベッ
ドだけは彼女の寝室という自然の決まりが出
来てきた。彼女も心理的束縛の比較的少ない
場所の方が気楽だったのだろう。泊まった時
に必要なパジャマやガウン・下着も私の為に
新しい物を用意してくれていた。幸いに私の
分身は、今のところ中折れ状態になることもな
く十分に活躍していた。多分心理的束縛は私
の方こそ強かったと思える。

「寄る年波に勝てぬ」という言い古された
言葉があるが、気が付くと私も若い頃と違い
寒さが苦手となっていて、行動半径も狭くな
っていた。郊外の十二月は朝夕の冷えが身体
に堪え、出掛けるのは日当たりのいい昼間と
決めていた。二人で昼食を食べる店も何軒か

定まり、週に何度か早目に出て店が混む前に
昼食を済ませるのが習慣となっていた。その
後、日によって互いの家でお茶を飲み、音楽
を聞きながらくつろぐこともあり、すべてが
出たとこ勝負だった。昼間は熱い口付けを交
わしても、その先へ進展することはあまり無
かった。独り暮らしとはいえ、集金・宅配で
訪ねて来る人に邪魔されなくなかったから
だ。ただ、口付けの途中から私の手が伸び、
彼女の胸や下腹部を襲ったことは何度かあつ
た。「馬鹿ね」と言いながらも彼女は私の手
や指での悪戯を拒否しなかった。
還暦を半ば過ぎていても、一週間に一度程
度の登板なら完投するのに問題は無かった。
それに、時として彼女から「今日はパーフェ
クト」と賞賛の声を聞くこともあった。
特に彼女に勧められて飲み始めた「ノコギ
リ椰子」の錠剤は分身に思わぬ強度をもたら
してくれたようだ。前立腺のトラブルから近
年夜中に何度かトイレに行くようになり、そ

れを知った彼女が同じ問題を抱えた友人の夫が良く効いたため私に紹介したものだ。

聞けばアメリカ・インディアンが強壯剤として古くから利用していたという。私にも効き目はすぐに表れ、夜中に起きる頻度も減ったし、なにより分身に強度が増したのが彼女にとっても良い結果となっていた。

お世辞混じりだろうが、彼女は「良い人に巡り会えた」と私のことを評価してくれた。現役である女性にとっての「良い人」は、当然肝心な方の満足も含まれていたのだろう。ノコギリ椰子は、結果として私の助っ人としての役を果たしてくれたようだ。

人は誰でも、そして何事にも初心者の段階からまずスタートする。特に性に関する体験は、男の場合最初から強烈な快感を伴い、機会も極めて少ない為、いざという時自分を見失いがちになる。女性との決定的違いは、射精と快感が一体化していて、未熟であっても

当初から快感を得ることが出来ることだ。相手の女性を慮る余裕など、その段階では全く無いと言っている。それには、人間のオスは殆ど例外無く最初は早漏の宿命を背負っている。

一方、女性は完全に開発されるまでには時間が掛り、人によっては出産後始めて絶頂感を経験することもあるようだ。また、一部とはいえ結婚していても一生それを経験出来ない女性もいると言う。

未経験の頃、この基本的な男女の違いを知ることも無く男は女性に群がり、何とか自分のものにしようとする。健康な男性なら、これは本能と快感に直結した行動で、生物の雄としては当たり前のことだ。

未経験の女性は自分で行う行為である程度の快感は体験出来ても、まだ究極の境地にまでは到達していない。こういった生理的な差が男女には存在していて、未開拓の女性が男を比較的冷静に選択する余裕があるのは、そ

のせいだろう。彼女達には男ほどの切迫感が無い為だ。ただ、彼女たちが男を好きになるという感情だけは、肉体の欲求や快感と必ずしも直結してないようだ。

男の欲望の処理には、必ずしも愛は要らない。ただ、未経験の女性の場合、好きにならなければ男に身を任せることは普通ないだろう。

こういった男女の肉体的特性の違いから行き違いが生ずる場合があるが、夫婦の場合、概ね時間が全て解決してくれる。誰もが通る道で、その試行錯誤が人生を彩るとも言えるだろう。

組み合わせが決まった後、何処で同調し、何処まで発展させるかは当事者の問題で、この問題は一般的な話題として公に語られることは無かった。それぞれが悩み、それぞれが克服するしか方法の無い、極めて個人的な課題だった。究極のプライバシーとして、公開されない秘密のファイルに収まったままの方

が圧倒的に多かったことだろう。誰もが他人の営みに関心があるが、誰もが触っていけないものだった。この究極のプライバシーが男の妄想を掻き立てるのも事実だ。

だが一方、食べるという本能に関しては、それを満足させる料理法が幾らでも公開されていて、研究もされている。美味しいもの追求には何の制限も無い。この本能に対するそれぞれの対処の違いには、暗黙の了解で語られない世界も人にはあると納得するしかない。

互いに過去を持った男女の出会いはある意味強者へつわものへの他流試合のような感覚で捉えることも出来た。私の乏しい経験から、女性が多様な感性と癖を持っていることを幾らか分かってはいた。実際、喜びの表現や絶頂での身体の反応には大きな個人差があった。男にはこういった発見にも興味があり、未知への探訪を何時までも続けるサムライもなかにはいる。小さな私など、関心はあ

っても自分から挑戦することは原則的に諦めていた。

彼女は夜になると普段の顔とは全く違った趣を見せてくれ、巧まらずして日常とは掛け離れた世界に毎回私を導いてくれた。新しい発見の多い彼女との行為に、私は完全に魅了されていた。

女性の持つ性への反応と適応性は、後に身に付けたものより、先天的に生まれつき備わったものが多いようだ。特に肉体の反応は天性のものとししか表現出来ないことが彼女の場合多々あった。

営みの当初から私の分身に絡みつく彼女の局部は、果たして学んで出来ることなのか或いは天性の反射運動なのか何時も疑問に思っていた。少なくとも他の女性から同じような反応を経験したことは無かった。

挿入早々から分身全体に壁面が柔らかく纏い付き、独立したような蠕動運動が分身に感じられた。緊張が高まり絶頂に辿りつく頃に

は壁面は固くなり分身を強く締め付けてきた。その緊張のまま何度も頂点を極め、最期の爆発に至るまでその強い締め付けは続いた。

到達した後は、あたかも乳首を口にする幼児のような緩やかな動きに変わり、そのリズムカルな動きは何時までも絞り尽くすように分身を吸い続けていた。爆発して頂点に到達した後も、女性には気持ちのいい状態が継続するらしい。行為の後すぐに離れようとしなしいのはそのせいだろう。男の私にとっても長く余韻を楽しむことが出来た。

一連の変化する局部の動きを、彼女は自分で意識してコントロールしている訳ではないと言っていた。私はその反応を「パブロフの条件反射」と名前を付けたが、それに対して「犬じゃないわよ」と彼女は笑っていた。先天的にせよ、後天的にせよ、男にとって是有難い反応としか表現の仕様がなかった。

どんな分野であれ、上には上があると思

知らされることがある。それを教えてくれるのは、普通なら見逃すようなことを丹念に模索して、より良きものへの精進を続ける人達だ。もの造り、料理、スポーツとあらゆる方面で匠の業を見ることが出来る。

男女の営みに対する取り組みや姿勢も千差万別だろうが、中には拘りを持って極めようとする人も居る筈だ。彼女の場合、偏見を捨て自分に正直な道を選んだだけだったようだ。それが、結果として達人の域に達していたと言えた。

私の他流試合での感想は、いい相手に恵まれたと言うしかなかったし、彼女も満足している様子から、相性が良かったと言うのが一番適切なのだろう。極上の楽しみが、暗かった。独り住まいの老境に突然訪れていた。人は自分の感性に合ったものを選び、それぞれの方面でそれぞれの挑戦をしている。全体的な選択は子供の頃から育まれ、普通、男の場合生活のため職業を選ぶことになる。特殊

な才能はスポーツ・芸術・学術と行った方面で生かされ、世間で名を成すこともあるだろう。ただ、多くの人は工場・会社・商店といった経済活動の場で働き、給料で生活の糧を得ている。そこでも並みの人間では到達出来ない域まで道を究める人も出てくる。特に熟練を必要とされる、もの造りの世界では頭角を現わす人が必ず出てくる。

自分の仕事が生き甲斐になる人も多く居ることだろう。また、反対に遣り甲斐を見付けられないまま人生を終える人も居るだろう。中にはそういう問題意識さえ持たず人生を過ごした人も居るに違いない。

人が拘る対象は色々あったとしても、生きている実感味わえるものに没頭する彼女は、自分なりの価値観を築いていたと言えるだろう。それは遠慮がちに後ろめたい気持ちで取り組むのではなく、正直に、ひた向きに自分の意志で参加していた。本人が満足し、相手も満足する営みは何ものにも代え難く、

一貫して追求する彼女の姿勢には爽やかさえ感じる事が出来た。

「良い人に巡り会えた」という彼女の感想は、正しく私の感想でもあった。

私は自分自身が大きな勘違いしていたことを彼女に知らされた。今まで、男女の営みに関して、自分の欲望を満足させる必要悪といった程度の認識しか持ってなかったようだ。人に語るものではないとしても、それは否定したり恥じたりする対象では決してなかった。夫婦や恋人の関係にあっては、どちらかが、若しくはどちらにも遠慮したり避けたりする必要はない。

独りで処理していた頃の後ろめたさが何時までも付きまとい、それがトラウマとなって行為そのものにも目をそむける習性が身につけていたようだ。発情としか表現の仕様が無い自分の肉体的現象を、ある時期忌み嫌ったこともあった。人に備わった動物としての習

性は、場所柄さえわかまえば何ら恥ずべきものではない。自分の煩惱を否定するか肯定するかで、人の生き方に大きな違いが生じてくる。後ろめたさや否定的な要素が無くなれば、心理的には葛藤も生まれない。肯定的に立ち向かうものには心理的負担は生じないものだ。こういった感覚は私固有のものかどうか分からないが、彼女には葛藤に類するものは全く見られなかった。ある意味、私はこの歳で彼女に教えられたと言っているだろう。そしていつの間にか彼女との新しい世界に自然と入っていた。

つい半年程前まで、寂寞とした孤独の闇の深さを実感していた自分が居たことを、今では信じられなかった。妻を亡くした後、一人で生きることが当時死ぬことより苦痛に思われた。少々の諍いがあっても、四十年に及ぶ夫婦にはそれなりの強い絆が出来上がっていたのだらう。だが、その喪失感から来た孤独と寂しさも、新しい彼女の出現で跡かたも無

く消えていた。この変わり身の早さを亡き妻に申し訳ないと思いつながら、私が救われたのも事実だった。

私がおの程度のおつたのか、そもそも人間はこの程度なのか自問していた。多分私は孤独な現実から逃げ出したかったのだろう。その選択も俺の人生だと開き直るしかなかった。遺影の妻との無言の会話は、最近むしろ増えていた。

ことさら寒かったこの年の冬も、やつと峠を越したようだ。

娘は、最近の私に女の影を感じていたのだろう。事情を聞いて、「子供の同級生の親同士ならスキヤンダルになるけど、互いに独り身のジジ・ババなら祝福だね」と受け入れてくれた。さらに「お父さんが良ければ何も言うことないよ」とまで言ってくれた。

たまたま亭主が出張で一緒に我が家に来なかった食事の後、この話題を切り出した。娘

は私の話を聞いただけで、それ以上深く詮索しようとはしなかった。思った通りの反応で、今更ながら娘を頼もしく感じた。よしんば私が何も言わなかったとしても、黙って受け入れていただろう。「道理で、最近元気だ」と思っていた」と笑いながら話を締め括ってくれた。

私達二人の関係がいつまで続くのか想像つかなかった。「忘れじの行く末まではかたければ」と考える必要が二人になかった。正に「今日を限りの命ともがな」という心境だったと言える。歳と境遇が私達に与えた結論だったのだろう。老境の身には今日が充実してさえいれば良かった。多分彼女も同じ心境だったに違いない。それなりに歩んだ長い過去があり、今から未来に備えるものは二人にとって何も無かった。幾ら親しくなれても、限界のあるカップルだった。

若い頃の恋愛には生活感が無いのが普通だ

ろう。良く言えば自分達の純粋な感情だけで成り立ち、一緒になった時の具体的な生活設計は何も無かった。性の営みも当然無いままの恋愛だった。実らずして終わる理由が、そこには幾つもある。

考えてみれば、今の私達二人は昔の中学・高校時代の生活感の無い恋愛を繰り返しているようなものだ。ただ違いは、今は経験豊かな男女の営みが大きな比重と意味を持っている。そこだけは、観念だけで取り組んだ若き日の恋愛とは根本的に異質なものだった。人はその年代によって拘るものが違ってくるようだ。年代によって変わる役目がそれを決定している。子供の頃・学生時代・独身時代・就職・結婚・子育て・定年退職そして連れを亡くした独り住まい、と順を追って振り返ってみると、それぞれに伴った責任の範囲が変わっている事に気が付く。役目や責任の範囲が変わってくれば拘るものも違ってきて当たり前と言えよう。

私が歩んだ、そして選んだ道が、例え幾多の偶然が重なっていたとしても、私自身の選択の結果だと考えるしかなかった。彼女を選んだ結果になったことはとてつもなく幸運で、素晴らしいものだった。

私達は、人として生まれて来た運命から逃れることは出来ない。人間以外の数多の動物は、与えられた本能によって自分の役目を終え、殆ど同質の世代交代を際限なく繰り返している。一方で、人間は高い知能を持つことで独自の文明を築き、価値観という知性の求める到達点も目指すようになった。お陰で進歩という概念は文明的な実用品の工夫・発明のみに留まらず、形而上的な文化面でも模索するようになった。これは人間にだけ見られる特質で、ホモ・サピエンスが万物の霊長として君臨する理由がそこに見られる。人が生き甲斐を求めようとするのも、知性のなせる業だろう。また、孤独とか疎外感を感ずるのも知性が発達した為だろう。犬や猿

に無い悩みを持つようになり、又彼等が感じることの出来ない喜びを感じることもなかったようだ。喜びを感じながら、その喜びが不安の原因になることもある。単純に生きられないのが知性を得た人間の宿命なのだろう。

郊外の田園都市にありながら、評判の高い鮎屋が駅の近くにあった。妻が気に入っていたこともあり、生前時々通ったものだ。又、常連として名前も覚えていたため、私は彼女を敢えてその店にはこれまで誘わなかった。それに入院を控えた妻が、「食欲は無いが鮎なら食べられそう」と言ったので、外食として最後に二人で来た経緯も、私の躊躇する要因となっていた。

だが、再度この店の名前が彼女から出た時は腹を括った。妻への思い出や義理立てに拘り続ければ、今の彼女をどこかで拒否する自分を認めることになるからだ。過去のしがらみを越えたところに新しい人生があると納得

するしかない。決して無神経な選択ではないことを妻は理解してくれるだろう。それに、世間の目という試練に立ち向かう意味もあった。

自分が一度失くしていた生き甲斐、もっと言えば生きることへの根源的な意欲を甦らせてくれた人を、私は自分にも世間にも恥じる理由は無かった。

穏やかな笑顔で私達二人を迎えてくれた店主は無駄口を叩かず、細部に至るまで神経の行き届いた仕事を何時ものようにこなしていた。凜とした職人の緊張感や店の清潔感には乱れがなかった。自分の仕事を天職として真摯に取り組む姿勢が客に受け入れられたのだろう。

彼女が手洗いに立った時、店主は私に声を掛けた。「奥様のこと、残念でしたね」
彼が私に語りかけた言葉はこれが全てだった。私にはそれで彼の気遣いが十分に伝わって来た。家内のことは誰かから聞いていたの

だろう。改めて彼の人柄を思い知らされた。確かな腕の奥に彼の生き方があったから、他人にその存在感を示すことが出来るのだろう。彼女をこの店に連れてきて良かった、と心から思えた。

彼女は鮎屋の評判を娘から聞いて知ってはいたが、訪ねて良かったと正直な感想を述べていた。「無口だけど、大人の気遣いが後になって良く分かる」と店主のことを評価していた。

「鮎屋の親方には講釈が多くて食べ方を指図する人がいるけど、彼は聞かれたことにしか口を挿まないのは好感が持てたわ」と褒めてもいた。

私は数日後、一人でこの店を尋ねた。そして分かったことは、店主は秋田から中学を出てすぐに集団就職で上京し、当時から評判の良かった今の鮎屋に住み込みで働きだしたそうだった。

跡取りのいない先代の親方は彼に期待して、自分も修業を積んだ銀座でも一流の店に預け、さらに腕を磨かせてくれたという。その後、養子縁組の申し出は断ったそうだが、店の跡を継ぎ、親方夫婦を親同然の扱いで見届けたという。懐かしむように、しみじみと先代を語る彼に、人としての温かみを感じることが出来た。

高等教育を受けたインテリ集団の組織にはあまり縁の無いエピソードだった。確かな人の営みで築いた人生は、単なる損得勘定で判断出来るものではない。有名大学・一流企業といった羽飾りを纏った人生では、人の本質を見る前にその人の持つ背景の肩書が、より説得力を持って目に入るようだ。そこには何故だか人間の匂いが希薄になっている。我々が本来拘るべきなのは人としてのあり方ではないのだろうか。教育の普及にも関わらず、未熟で知性に欠ける高学歴者を世間では良く目にする。それに比べると、この店主の佇ま

いには人としての風格さえ感じることが出来た。

ほんの一寸した心遣いで、人と深く知り合うきっかけになることがある。始めは笑顔の会釈や、時としては「有難う」の一言だったりする。相手の立場になって考えた時、自然と互いの心が開けてくる。生きている時の殆どの問題は、相手の立場を無視、若しくは損得の視点から受け入れないことにありそうだ。客の立場になって天職を全うする店主の生き方は、人間の基本でありながら、自分が携わった仕事の範囲では、あまり経験したことが無かった。

自分が主体として生きるか、或いは組織の一部として生きるかの違いだろう。私自身の経験では、会社ではむしろ身内の上司に気を遣う人間の方が多かったような気がする。

「鮪は器用な若者なら、握ることだけは直ぐに出来るようになります。先代の親方が私を銀座の店に修業に出してくれたのは、お客

さんとの対応を学ばせるためだったと思って
います」

店主の推測は当たっていただろう。客と直接
対面で鮓を握る飯台は、客との戦いの場でも
ある。口の肥えた客を納得させ、気難しい客
にも満足して貰う受け答えを彼なりに極めな
ければならなかった。

「最近はず役をやりたいがる職人が増えて」
とも店主は言っていた。誰が考えても主役は
金を払って食べる客に決まっているが、店主
の指摘には私にも心当たりが幾つかあった。
基本が出来てない人間の陥り易い盲点でも
ある。会社組織にも、その類の勘違いしたや
り手は幾らでも居た。

私の実感としては、一流とはいえ会社勤め
は整備された道を決まった通りに歩かされて
いる人生に過ぎなかったようだ。会社の名前
を背景にして取り組む仕事には、ある程度の
仕事の達成感はあるけれども、個人としての満足
感には浸れなかった。大きな組織ではそれに

値する仕事が出来ることが、個人はあくまで組織の一員で、誰かにとって代られても何ら支障は無かっただろう。組織で取り組む仕事の大事は分かっているけれども、自分でなければならぬという個人の充実感はない。たいして無かった。

そんな生き方にいか程の意味があったのだろう。むしろ、定年という終着点まで恙なく進むことに、疑問さえ持たない人間が多かったようだ。この鮪屋の店主と話していて、自己完結した達成感の方が、価値あるものに見えるようになってきた。少なくとも遣り甲斐は、組織の一員として取り組む場合と比べ、個人の仕事の中により見出せるだろう。

季節の変わり目を最近敏感に感じるようになってきている。暇になって自然の変化を見る時間の余裕が出来たことと、暑さ寒さがより身に堪える年齢になったことにも原因があるのだろう。大寒が過ぎて、寒さが日ごと遠のく

のは誠に有難い。

年相応に身体は経年劣化が進んでいるのだろうが、特にこれといった支障は今のところ無い。健康診断も、現役の時は会社で強制的に毎年受けさせられたが、引退後は一度も受けたことは無い。

「強いて病気を探すことはない」という知人の医者への助言に従っているだけだ。まして今の私には健康に気を付けて長生きする理由がない。それに致命的な病気が見つかったとしても、余命を赤の他人の医者に機械的に告げられたくもない。これも、一通りのことをやり終えた老境が到達する、人生哲学の一つなのだろう。

残り時間の短さは本人がどこかで折り合いをつけるしかなかった。徐々に迫り来るものにはなかなか気が付かないが、考えてみれば出来なくなつたことは幾らでもある。

春秋に富んだ頃は、未来に向かって開けた時間は無限にあるように思えた。知恵が育ま

れるには経験という長い時間の経過が必要な
のだろうが、分かりかけた頃には既にその時
間が残り少なくなっている。人はいつも無い
物ねだりをしながら生きている、と単純に達
観するしかなかった。

連れ合いを亡くした後に訪れた青春は、人
生劇場における最期の舞台となるのだろう。
正に余生としか形容の仕様が無い残り時間に
現れた、かけがえの無い共演者の彼女を大事
にしようとして、改めて思った。

人は何か心躍るものを何時も期待しているようだ。どんな種類の娯楽であれ、人が熱中するのはそのせいではなかろうか。その対象は年代によって変わり、子供の頃のビー玉集めを続ける大人は普通いない。人によってはその対象がゴルフであり、マスタージャンだったりするだろう。だが娯楽のみならず読書や絵画・音楽の鑑賞にも心躍らせる人はいる。そして何にも増して心躍るのは、好きな人が出来た時だろう。その関係が片思いではなく相思相愛だったら、これ以上の喜びは無いと思われる。還暦をとくに過ぎた歳で、魅力的な女性を得られたことは、或いは人生最後のチャンスなのかもしれない。若い頃はそれなりに色恋沙汰の幾つかあっても不思議ではないが、老境での出会いはそんなにあるものではない。考えれば考える程自分は運が良いと思った。

一週間に一度程度の愛の行為が年甲斐もな

く待ち遠しく思われることもあった。正に心躍る時を過ごしていた。二人が知り合って既に半年以上経っているが、知り尽くしたと思える秘技の数々も、毎回新鮮に甦り新たな官能の火を燃え立たせてくれた。何よりも彼女がその都度深く達する様子が私にとっては大きな刺激となっていた。

普段、清楚で品のある彼女の、取り憑かれた如く乱れる様に、私の内なる野性が逞しく反応していた。私にもそれなりの経験があったが、彼女の反応は過去出会った女性たちの例と比べても次元が違ったものに思えた。かつて私が未熟だったため相手を充分開発出来なかつたとも言えようが、それでも彼女は別格の存在だった。

ある時、彼女の実家は名のある武家の出だったと説明し、祖母の嫁入り道具だった短刀を見せてくれた。「貞節な妻は二夫にまみれず」という教えで、夫以外の男性に迫られた時、自害する為の短刀だったらしい。昔の武

士の妻としての心構えだった習慣が残ったの
だろう。それに嫁入り娘の心得として男女の
行為を解説した古い指南書もあったという。
さばけた母が一度見せてくれたそうだが、そ
こには女性が月のもので行為が出来ない時、
口で処理する方法が書いてあったと彼女は説
明してくれた。その、「口取り」という記述
が生々しく、彼女の記憶にいつまでも残った
そうだ。嫁入り前の彼女に、母が教育をして
くれたのだろうと笑っていた。
彼女の話を聞いて、私は先人の知恵と女性
の逞しさを見た思っていた。アメリカでの、
今では市民権を得たような、おおらかに見え
る彼女達の秘儀は、日本でも伝統的に受け継
がれていたことを彼地で実感したそうだ。
「人間、本音では何処も同じだとその時感
じたの」、という短い感想の中に女性の順応
性を知ることが出来た。男は若い頃女性を偶
像化し、好きな対象が見つかった時には神聖
なものとして崇める傾向がある。その傾向は

童貞を失くすまで続き、女性を何人か知った後始めて女性の真の姿に気が付く。

人の性（さが）は慣習や宗教では簡単に制御することは出来ないのだろう。人間を本来のまま生きている女性こそが、その本質を良く知っていると言える。子供を生んで育てるといふ役目は、男が考えるような建前論を遥かに凌ぐ力を持っているようだ。

彼女との関係について、私は最近あまり観念的な意味を詮索しないようになっていた。欲望がある限りむしろ積極的にそれを満たすべきだと考え、その喜びを素直に受け入れることにした。過去のしがらみや世間体に拘っている自分が、単に気の小さい老人に思える事に嫌気が差していた。堂々と謳歌すればいい、と開き直ったような心境だった。これも彼女の影響だろう。

人は自分のやっつていることを否定しながら生きることは難しい。むしろ開き直りでもいいから肯定した方が、ストレスが少なくて済

むようだ。私が取った手段は単に自分に対する言い逃れだったのかもしれない。人間は暇だと色々考えるものだが、彼女との実際の秘儀が諸々の思考を打ち砕く程の力を持っていたということだろう。

桜の満開にはまだ日があつたが、郊外の景色はすっかり春めいていた。

胸を強調したような、花柄をあしらつたカシミアのセーターと、短めにカットした髪形は彼女の実際の年より遙かに若い印象を与えていた。それを意識したかのような満面の微笑みで、彼女はマンションから現れた。

時として店で「お嬢さん」と呼ばれることがある、彼女は面白がつてそんな店に行きたがつた。胸は本物で、今日の若作りでは何処に行つても私の「お嬢さん」、という評価は間違いないだろう。皮下脂肪はあるのに太つては見えない、俗に言う着痩せするタイプのようだ。私は昼食の場所選びを彼女に任せる

ことにした。

彼女が選んだ、近くの表通りにある人懐っこいイタリア人経営の店は、その値段にも関わらず何時も混んでいた。郊外の昼食で数千円も出す客は少ないと思われるのに、婦人達の様々なグループが、その日も帰る頃にはほぼ全席を埋めていた。スパゲッティなど単品を千円以下で済ますサラリーマンと思しき男性客は、食べると直ぐに席を立っていた。ここでも強い女性達が目立っていた。

陽気なイタリア人は黙っていても、私たちの好きなキャンテイー・ワインをグラスに注いでくれ、「お嬢さん、何食べますか？」と彼女を喜ばせていた。その語りかける物腰には、彼女に気のある風情が見え見えだった。年上の日本人の奥さんが彼のやり取りを見て「イタリア男は油断出来ない」と怒っているので事情を聞いたら、客の若い女性に最近手を出したそうだ。それでも彼らは基本的には仲が良かった。「そんなの気にしていたら、

イタリア男と結婚なんか出来ない」、と最後は豪快に笑っていた。夫婦の愛にも色々あるとしか言えないようだ。いつものように帰り際にお土産のピザを焼いて貰った。

「女は男が自分に関心を持つと嬉しいものなのよ」と、店を出ると彼女は本音を聞かせてくれた。女は幾つになっても変わらないと思ったが、彼女には言わないでおいた。

食後は昼夜に関わらず、彼女の自宅で時間を過ごすことが最近多かった。それに泊まるのは彼女の自宅と自然に決まっていた。「通い婚」と彼女が言ったのは正に当を得ていたようだ。これは多分に利便性から出た結論だったが、女性が采配する住居の方が男にとっても居心地が良かった。私たちは互いに確認もせず、当たり前前のように近くの彼女の自宅へ向かった。

娘との約束や、会社OB会の集まり等で彼女と会うのは一週間振りだった。最近では、こんなに間が空いたことは無かった。私たち

は若い恋人同士のように、部屋に入るなり互いにきつく抱き合った。

「触ってみて」と、突然彼女は私の手を取るとスカートの中へ導き、自分の状態を確認させた。そこは、すでにぬめりを持った液体で溢れていた。まだ何も始まっていなかったが、彼女の身体は既に準備が整っていた。

「久し振りにあなたに会えると思ったら昨晩から独りで盛り上がり、あなたに会った時から濡れ始めていたの」と、彼女は何かを訴えるような目付きで私に説明した。自分を心身共に待ってくれている女性が居ることに、私は感動さえ覚えた。

抑えきれない内からの衝動を、彼女は隠さず私に伝えていた。信頼し合った仲でなければ、女性が自分の欲望を赤裸々に告白する筈がない。私も内なる衝動の儘に彼女に応えて下着を脱がせ、立ったままの下半身に顔を近づけた。

「待って」と、私を制した彼女はトイレに

行き、局部を洗って来たようだ。トイレにも液状のソープが何時も置いてあった。ウオシユレットの普及は秘めごとの段取りまで変えたようだ。

陶器を思わせる小さな丘からその下の溝へと舌での探索は執拗に続き、洗って拭いたばかりの泉には既に透明の液体が内側から溢れ出てきていた。

立っているのが負担になったのか、彼女は自分からソファーに移り、身体が弛緩したような緩慢な仕草で、そこに身を投げ出した。前にもソファーでのプレイは経験があり、彼女の拵げた秘部は床の絨毯に座った私の目前で丁度いい位置に納まっていた。燃え上がった、あの時を思い出している彼女の行動だったのだろう。誘いの行動であることはすぐに分かっていた。私は彼女の期待にあの時も、そして今度も十分に応えた。

彼女の感度は、繰り返す毎に鋭敏になっていくような印象だった。進化している確かな

兆候が毎回見られた。その進化は私にとっても最大の楽しみで、彼女の敏感な反応が私を若返らせてくれていた。自分の働き掛けで、淑やかな女性が乱れていく様は、私にとって何よりの刺激的な媚薬となっていた。とことん限界まで極めようと悦楽を求め、彼女は、直ぐに自分の世界に入り込み、無我の境地で彷徨っているようだった。私はひたすら一方的に口で奉仕し、何度も頂点を極める彼女を愛おしく感じていた。彼女は安心して全てを私に任せていたのだろう。深い男女の絆を実感出来る時間だった。

男は頂点に達したら短い快感の時があり、放出後には倦怠感に襲われることがある。心地良い充実後の倦怠感ではなく、時としていわれなき罪悪感を秘めた感覚が残る事がある。独りで放出していた時の名残なのだろうか。それに比べれば、女性には全く迷いや疑問は無さそうだった。快感の度合いも男より遙かに強烈で、その時間も長かった。私は単

純に「子供を生む為の神のプレゼントだ」と表現したら、彼女はその言い廻しをいたく気に入りに入り面白がっていた。

雄（オス）はライバルの出現や、体勢が無防備になって襲われることを常に警戒している。この動物の本能は人間にも受け継がれていて、早く交尾を済ませることが確実に自分を守り、その種を残す最善の方法だったのだろう。女性に比べ、男が我を忘れて営みに没頭出来ない理由が分かるような気がする。

自分を守るため鍵を閉め、二人の密室を確保するのは後天的な人間の知恵なのだろう。私たちは鍵の掛る密室も確保してあるし、さらにこの歳ならライバルの心配もあまり必要無かった。神の与えた余碌である快樂の部分存分に楽しむだけで良かったようだ。

還暦・定年退職・肉体及び男性機能の衰えといった、晩年通る道を人は避けることが出来ない。さらに何時かは分からなくても必ず訪れる伴侶との永遠の別れが待っていて、最

後には自分自身の存在も無くなることを知
ている。ただ、人は生きている間は死につ
て自分のことではない、と思い込んでいる節
がある。また、その経験者が唯一語れないの
が死ではないだろうか。

こういった感慨を持つのも高齢者ゆえだろ
う。残された時間の大切さを一番身につまさ
れる年代だ。しかし思えば、この積み重ねら
れた時の経過が、何をやるにも諦観の意識を
植え付けていたようだ。そのせいか、彼女の
感極まったような悦びにも、どこかで冷静に
観ている自分があった。それでも内から湧き
上がる性エネルギーの強さに満足していて、
現役の男であることを彼女に対して誇らしく
思っていた。私にはまだ力が残っていた。そ
してひたすらその日は一方的に奉仕した。

桜より先に、プランターの花々が満開状態になっていた。一年草の花の種は、昨年秋口に娘が買ってきて、私は適当に蒔いただけだった。ただ、水やりだけは特に気を付け、枯らさない様に注意していた。そのせいかどうか今では見事に咲き誇っていた。

枯れずに生き残っていた家内が育てた幾つかの鉢の植木も、一年草に負けじとばかり、花の競演を織りなしていたが、その名前は未だに知らないのがある。ただ、家内の伝統は数が減っても辛うじて守られていた。

思えば、彼女の病気が見つかったのは一年前のこの頃だった。命の儂さを実感した身には、生けるもの全てが愛おしく思える。鉢植えの花々にも、今年は今までと違った視線を注いでいた。人は何かを経験すると、新たな視点を持つことになるのだろう。これが人の年輪なのかもしれないと思った。

考えてみれば、極めて平凡な人生だった。学生時代は人並みに勉強し、トップとはいえ

ないまでも一流と称される大学に入り、一流と評価されている企業に入社することも出来た。二十代半ば過ぎには妻と知り合い、短い恋愛期間を経て結婚した。

会社での仕事は、一応人並みのことは出来たという自信はある。むしろ人並み以上だったという自負も本音の部分ではある。

子供は娘一人だったが、彼女も順調に育ってくれた。何処にもある幸福な人生の絵柄だろう。家内が亡くなるまでは大きな問題にも遭遇しなくて済んだ。

人が晩年を迎えた時、自分のこれまでの人生を振り返り、何がしかの総括をするのはごく自然な人の行動なのだろう。「はたして私の人生は何だったのだろうか？」、という疑問は、誰しも一度は持って当然だ。

しかし私にはその疑問に対する確たる答えは出なかった。何も問題が無かったことが幸せだとすれば、そしてそれを平凡だが人並みの人生だとすれば、それでも良かったのだろうか

う。社会的には私より恵まれない人は沢山居るに違いない。「上を見れば限がない」と明治生まれの父がよく言っていた。大した才能に恵まれていない男にしては、上々の人生だとの評価もあるだろう。

若い頃に読んだ本が未だに残っているものもある。表題を見ても、かつて何かを求めているた気配は感じられる。

自分が望んでいたことと、実際出来たことの間には大変な違いがあることを今となれば認めざるを得ない。若き日に夢見たことは、結局何一つ自分のものにはならなかったようだ。何かしら残したいと、分不相応な野望を持つのも若気の至りだろう。また、現実との乖離を疑問に思わなくなるのも成長の証かもしれない。ただ、老境で自分の人生を振り返る時、「結局パンを沢山求めただけ」としか思えない経歴に忸怩たる思いが募るのも事実だ。会社での貢献は幾らか日本経済に役立つたかもしれないが、実態は個人の生活の安定

を求めていたに過ぎない。

人より幾らかでもましな生活を求めて学び、働いてきたというのが正確な分析だろう。良く考えてみれば、私には何も誇れるものが無かった。

良心の叫びか凡人の悲哀か分からないが、時として自分の人生を振り返って反省を試みることはある。ただ、あまりにも全てが複雑に絡まっているため自分の思考さえ纏めることが出来なかった。凡人の結論はだいたい現状容認と決まっていて、それが自分なのだと言いき直っていた。矛盾も辻褄も関係なく、深く思考することを雑に放棄していたというのが実態だ。サラリーマンと、その定年退職者に何が出来るというのだろう。人は常に自分に無いものをねだっているに過ぎない。最後は、生きて来たこと自体に価値があると思わざるを得なかった。

その中で挫折もロマンスもあり、自分がの

めり込む物を見つけることが出来れば幸とするべきなのだろう。考えることは必ずしも人を幸せにしないようだ。

鮎屋の親方が先日、「成長が止まった人間に教えるのは難しい」と言った意味が分かるような気がしてきた。自我が出来上がってしまつた人間は、自己流の判断をするようになり、自分の中で形成された価値観を優先する。素直に受け入れる素地の無いところでは、新しく学ぶことは難しいようだ。

職人の世界で一人前になるには、毎日の仕事をあたかも自分の習性のように処理しなければならぬと彼は言っていた。

「習い性となる」の境地に至って始めてプロの仕事が出来る、とも彼は力説した。「私どもには、それしか生きる道がありませんから」と卑下する彼に、多くを教わつた気がした。

俗に「身体が覚える」というのは、そこからきた言葉なのかもしれない。理屈では分か

つていても、それを毎回基本通りに繰り返すことが出来なければ職人とは言えないのだらう。

自分のことを考えてみれば、それ程打ち込んで挑戦したものは何もなかった。全てが中途半端なのは当たり前だと納得した。幅広く学んだ末に何にでも対応出来る、その柔軟性を誇ってみても、自分にしか出来なかったものは何も無い。役割の違いと言って納得するしかなかった。もしかしたらサラリーマンは、自分を消した存在が一番理想的なのかもしれないとも思った。自己完結が難しい、或いはそれを実感出来ない環境では、人はなかなか満足出来ないものだ。言い古された「組織の歯車」が私の人生の全てだったように思えてならない。

流れに身を任せる習性は、もしかしたら建前は個性を強調していて、実態は均一な金太郎アメを生産する教育に原因があるのではなからうか。現代社会は人間に個性を求めている

ないように思える。と言うより、それぞれの分野が専門化して、経済効率を考えれば自ずと今の形に落ち着かざるを得なかったのだろう。そんな時、個人で自己完結した職に従事する人が輝いて見えるのは当たり前かもしれない。他人の芝は青く見えるだけなのかとも思った。達成感の無い人生は、流れに身を任せた結果であり、それが自分の限界だと認めるしかなかった。

こういった感想を持つのは、自分の人生で挑戦することをしなかった大方の高齢者の正直な本音ではなからうか。或いは凡人に与えられた運命（さだめ）なのだろう。結果として、老人性の鬱になるのも或いは良心の表れかもしれないと思った。

彼女は突然「海を見たい」と言い出した。いつものように昼食後、彼女のマンションでお茶を飲みながら雑談している時だった。前から彼女は考えていたらしいが、私が旅行を好きでないことを知っていて今まで言い出すのを遠慮していたという。言われてみれば、郊外の住宅地でも魚は流通の発達のお陰で各種新鮮なものを食べられが、海そのものは遠い存在になっている。

彼女が喜ぶことなら、少々のことでも反対する気はなかった。混んでいそうな週末を避けて出掛ける計画だけを立て、行き先も決めず宿も予約しなかった。晴天の続く日を見計らって出発することを取り敢えず決めた。

彼女は最初、日本海方面を希望したが、結局東京駅から西へ向かう新幹線に乗ることにした。出発当日の切符を買う時になって、やっと行き先が旅行気分を味わうため静岡方面に決まり、浜名湖を目的地とした。旅をするなら、あまり近過ぎては気分が出ないという

彼女の主張を受け入れての結果だった。

新幹線を降りて駅前の飲食店で軽い昼食を取り、店の主人に浜名湖を望む旅館を尋ねてみたら直ぐに紹介してくれ、自分で予約まで入れてくれた。還暦に近い年齢と思われる店の主は、この旅館の経営者とは懇意にしている、客の評判が良いからと熱心に勧めてくれた。こういう世話好きの人が経営する店は、美味しくて混んでいるものだ。飛び込みで入った店だったが、余計な手間が省けて助かった。これも旅先での、いい思い出となるだろう。

思ったより立派な日本旅館で、通された部屋からは浜名湖の全貌が見えた。宿帳に、夫婦として私が記帳したことを彼女は喜んでいった。別々の名前では旅館の余計な詮索を招く為の自衛手段だったのに、彼女は違った解釈をしたらしい。こういう時は、敢えて真意を説明する必要は無いと思って黙っていた。

部屋に案内した仲居さんが「若い奥さんで

すねーと私に話し掛けたのが彼女に聞こえたのだろう。その「若い奥さん」は用意してあった小さな封筒に入れてある心付けを、受け取りを固辞する感じの良い仲居さんに笑顔で渡していた。

そう言えば彼女は私を「あなた」と、この旅が始まる列車の中で呼んだ。それまでは私の名前が慣例になっていて、「あなた」ではなかった。心の中で期すものがあったのだろう。

入浴や食事にはまだ間があったため、仲居さんが勧めてくれた浜名湖沿いの散歩道を、手をつないで歩いた。これも始めての経験だった。生活している周辺では、手を握ったの散歩を経験したことは無いが、知った目の無い旅先での解放感がそれを可能にしたのだろう。年甲斐も無くという思いがよぎったが、私は彼女のなすがままに任せた。そしてむしろそんな彼女が愛おしく思えた。単なる旅先での感傷なのだろうか。

浜名湖のほとりで「空気の味が違う」と、彼女は呟いた。東京でも郊外に住んでいるため、通勤の度に都心にある会社周辺の空気と微妙な差があることに気が付いていた。大学入学後、初めての夏休に故郷に帰った際にも、東京の空とは星の数が違う事に驚いた覚えがある。空の色や海の色鮮やかさも、帰省する度に実感した。「東京には空が無い」と嘆くのは、詩人の妻だけではなさそうだ。ここには空も海も、そして美味しい空気もあつた。久しく忘れていた自然の安らぎを思い出すことが出来た。これも旅ならではの発見なのだろう。

旅館へ戻ると、先程の感じの良い仲居さんがフロントで「奥様、家族風呂が空いています。すが、如何ですか」と勧めてくれた。先程見たパンフレットに依れば幾ばくかの料金が掛る筈だったが、「旅館からのサービスです」と私の奥さんである彼女に笑顔で申し出ていた。

「あなた、折角だから」という彼女の言葉に無言で頷いた。どうやら彼女が渡したチツプの額が、仲居さんの好意に結び付いたようだった。私たちは仲居さんの好意により、幾つかある中で一番見晴らしの良い家族露天風呂に夫婦として入ることになった。旧館には何時でも入れる大浴場があったが、そこは男女別々になっていた。

家族風呂のある別館は本館より明らかに新しい建物で、檜風呂の香りは旅人の心を和ませてくれた。清潔感に溢れ、かつ落ちついた雰囲気だったため、彼女はいたく気に入り旅の延長を風呂場で口にした。入口には午後三時から十一時まで利用可と書いてあり、独占出来る時間が一時間単位に区切っていた。見慣れた彼女の裸ではあったが、旅先の高揚した雰囲気は十分に読み取れた。彼女は積極的に背中を流してくれ、頭も洗ってくれた。無毛の裸体が目の前で躍動する様は何度も見ているのに、この時も新たな驚

きがあつた。

頭が終わると彼女は前に座り、手を泡だらけにすると丁寧に私のものを洗ってくれた。大事なものに接しているとしても言う様な手付きは、毎回私を充分興奮させてくれた。柱を根元から静かに揉むように洗いあげる動きは、私の支柱の力を甦らせ、頭の部分に到達した時はその動きに微妙な変化が生じていた。

それは単に洗う目的だけではなくなっていた。私も手を泡立たせて、彼女の無毛な丘に続く溝を洗い始めた。恒例の手順で、互いにある程度高まるまで手を休めなかった。微妙で執拗な指使いに彼女は素直に反応していた。すぐに柔らかい髪が、異質な湿り気を内側から指に伝えてくれた。彼女から声が出る頃には、私の指は髪の奥に吸い込まれ、やがて緩やかなリズムで吸引が始まった。何時もより早い敏感な反応だった。これも、旅先での高揚感が反応を早くし

たのだろう。

風呂に浸かった後も彼女は自分の内なる激情を隠さず、私の支柱に対してむさぼるように口を使ってきた。丹念に舐め揚げ、啜える様は狂気を感じさせる程だった。その愛しい奉仕に思わず手を背中に当てると、彼女は電気に打たれたような反応を示した。彼女独特の、興奮している時の反応だった。

燃え盛った火を消す方法は一つしかなかった。洗い場で横になった私の上で、彼女は思いのたけを込めてひたすら快感を求めた。何時もより早く訪れた悦楽の波は何度も繰り返し、抑えても自然と出てくる声が、より艶めいて聞こえた。彼女が最終ゴールに達するまで私は辛うじて自制した。

少し湯殿で温まった後、疲れ切った様子の彼女を抱えるようにして部屋まで戻ったが、彼女はすぐに座布団の上で横になってしまった。湯冷めしないように掛け布団を出し、眠りに付くまで暫く手を握っていた。深く達し

た後には心地良い眠りが訪れる、と彼女は前にも言っていたことがある。前夜の睡眠不足と相まってすぐに寝息が聞こえて来た。彼女の手を離し、窓際の椅子に座って煙草を取りだした。小さなテーブルに灰皿が置いてあったので禁煙ではなさそうだった。立ってガラス戸を開けると外では浜名湖を一面照らしていた陽が、少し陰り始めていた。釣人を乗せたと思しき小船が岸へ向かっていた。煙草も空気のせいかわいしく感じられた。

「すつきりした」と彼女は笑顔で目覚め、隣で横になっていた私に抱きついて来た。夕食が運ばれて来るまでの一時間あまり熟睡していたことになる。彼女の説明では前の晩、気分が高揚して寝付きが悪かったそうだった。そう言えば、新幹線の中でも居眠りしていた。「小学生の頃、運動会や遠足の前の日はいつも興奮してなかなか眠れなかったわ」と、幼き頃の思い出を語り、「子供みたい」と付

け加えて笑った。

私との旅行をそれだけ楽しみにしていたのだろう。彼女の素直で無邪気な期待を私は心から喜んだ。同時に彼女が半端な思いではないことも知らされた。

夕食に出た浜名湖で獲れた魚の料理には日本酒が合い、酒のお代わりが二度まで追加された。お銚子を運んで来た例の仲居さんが、「お布団を敷いておきますね」というのに頷き、彼女はもう一泊の延長を頼んでいた。私に異存はなかった。

仲居さんが食卓を片付けた後、お茶を飲みながらテレビを見ていると、彼女は私のものを求めてすぐに口を使ってきた。酒のせいで大胆になっていたのだろう。まだ終わってなかった私には、その気は充分あったが彼女の誘いには乗らなかった。酒と満腹の後でのハードな務めには、相応しくない年齢になっていた。

口での攻撃が一段落したところで「食後は

少し休もうと、本格的な戦いを避けた。その代り、下着を履いていない彼女の下半身に手を伸ばし、静かに指を入れて動かした。風呂場で高揚した残りもあつたのだろうが、そこは既に臨戦状態だった。テレビの音を高くして、彼女が満足するまで私は指を動かし続けた。彼女は何度も声をあげて全身で喜びを現わした。

私は子供の頃から車酔いがひどかった。お風呂も苦手で、何度もふる場で気持ち悪くなつた経験があり、その都度足に水を掛けて貰つた覚えがある。熱い風呂、長湯が苦手で、乗り物も電車・汽車以外は避けていた。飛行機も最初は必ず乗り物酔いの薬を飲んで利用していた。長距離の乗り物利用に薬が要らなくなつたのは、四十代になつてからだった。ただ、船に乗る時は未だに薬が必要で、新幹線も二階席を利用して気持ち悪くなつたこともある。

そんな経験を持つ男が旅行を好きになる訳がなかった。人の好き嫌いの判断基準はその人の持つ弱点と大いに関係がある筈だ。私には生れつき弱点が多かったが、人はそれを我儘と言って無視されることが常だった。自分が持たない弱点に関しては、人は寛大ではなかった。

自律神経の失調・過敏性大腸・不整脈・睡眠障害等々、若い頃医者が私に診断した結果を覚えているが、それに対する根本的な療法は無かった。全て対処薬だけで一時的に症状を抑えるだけだった。そういった症状を気にしないように心がけ、一切の薬や安定剤を放棄してから私の症状は少しずつ改善したようだ。開き直ったと言うのが、正確な分析なのかかもしれない。気にしていたら私は未だに若い頃の症状を幾つか引きずっていたかもしれない。なかつた。ただ、後遺症として旅行嫌いの傾向はこの歳でも私に残っている。そして場所が変わると今でも確実に寝付きは悪かつた。

旅館での一夜は酒を飲んでいた為、寝付きはさほど悪くなかったが尿意を催して目が覚めた。トイレから戻って時計を見ると四時を過ぎていて、浜名湖には明りを付けた船が数隻既に動いていた。煙草に火を付けるのを見計らったように彼女も起き出してきた。早めに寝付いた彼女も充分睡眠は足りたようだった。彼女が淹れてくれた熱いお茶は、渴いた喉に美味しく感じられた。考えてみれば、静岡はお茶の名所だった。

「目が覚めた時、一瞬自分が何処に居るのかわからなかった」と彼女は呟いた。寝る場所がいつもと違うと、こういった思いは誰でもするものだ。

「あなたが居るのを見て、ほっとした」と彼女は真顔で私の目を見て訴えた。しみじみと語るその口調に、彼女の思いがこもっているように感じられた。この旅行は単に彼女の思い付きではなかったようだ。それでも私は

深く詮索しなかった。

私たちは自然に知り合い、お互いに気に入った相手だと認めたため、今の関係になったと理解していた。確かに進展は速かったが、若者の活力に満ちた衝動は無かった。全てが分別ある大人の判断だと納得していた。

互いに語った過去もあれば、語りたくない過去もあるだろう。一途に燃える若者の恋ではなかった。足りないものを補い合う関係とというのが、私たち二人に取って一番相応しいと思っていたし、そこから敢えて前に進もうとしていなかった。まだ、現役で通用する下半身の問題に関しても、功利的な判断をすれば極めて互恵的な展開と言えた。本音で言えば、むしろそれは二人を繋いでいる太いパイプだと認識していた。

旅先で彼女の女らしい振る舞いを見るにつけ、今まで思っていたことが自然と頭に浮かんできた。何かを彼女は私に期待しているに違いなかった。

「海が見えて、空や星を感じるのがこんなに素晴らしいとは思ってもいなかった」
外を眺めていた彼女は率直な感想を口にした。「酒や食事が美味しいのも、空気がきれいなせいかしら」と付け加えた。言われてみれば、私にとって旅での新しい発見だった。都会に暮らすということが、自然から遠ざかっている事実には普段私たちは気が付いていないようだ。自然に直接接触した時、幾つになっても人間は原点に戻ることが出来るのだろう。海や山が身近な環境で子供時代を過ごした私は、今でもどこか根源のところで自然を求めているのだろう。
故郷の野や山は、当時そこで育った子供にとって食べ物の宝庫だった。野イチゴや柿は買って食べるものではなかった。他には無花果やザクロも買うものではなかった。運が良ければ自然薯さえ掘ることが出来た。貝類も海に潜って取って食べた。私の時代には、これは田舎でのごく当たり前の子供達の風景だ

った。こんな自然がまだ残っているところは
あるのだろうか、都会の子供には叶わぬ夢に
なっている。

私に寄り添って座り、手を握りながら交わ
す彼女との会話の流れの中で、子供の頃を同
時に回想していた。

浜名湖に少し明るさが出て来た頃、彼女は
大浴場での入浴を提案してきた。子供の頃の
入浴でのトラブルがトラウマとなって風呂に
入るのもあまり好きではなかったが、私は彼
女に従った。早朝で人気も無いことから、彼
女は私と一緒に男風呂に入ると言い出した。
温まるだけだったので、私は強いて反対しな
かった。

仲居さんが説明していたように、大浴場か
らの眺望は明るければさぞいいだろうと想像
出来た。薄明りの中でも、何艘もの船が慌た
だしく外海へ向かっているのが見えた。薄暗
い中で輪郭がはっきりとしない船とその明り
の動きが水面に映えて、何か神秘的な光景の

ように思えた。

幸いに誰にも邪魔されず早朝の入浴は無事に済みますことが出来た。例え誰か入ってきてても彼女は動じなかつただろう。風呂から出た後、「中から見えるという事は外からも見えるわね」と、悪戯っぽく笑っていた。

部屋へ戻った頃、さらに明るさは増してきた。日の出前の海は、薄明り中でその重厚さと存在感の大きさを、尊大に見せつけているようだった。

雄大な自然の息吹の下で、私の内に秘められた野性の本能まで揺さぶられる思いだった。意識していないのに湧き出る生命力の実感は、彼女の存在に発情しているオスだけでは済まされないものが私にあった筈だ。

私の単なる思い過ぎしか、こじつけかは分からないが、オスがメスを求める原始的な儀式に自分の思惑を超えた生物の務めにまで思い至った。要を得ているかどうかは別としても、彼女を前にした私の素直な実感だった。

それは先の短い老いた男が辿りつく、生きる
ことへの執念に過ぎないのかもしれない。た
た。生きている証を求めていたのだろう。
残った生命力を全てさらけ出したような営
みが始まった。かすかな潮騒をかき消す彼女
の喜びの声が、組み敷かれた私の下ですぐに
出始めた。それは何時もの苦痛に満ちた表現
だった。私に下から抱き付く腕の力が増すに
付け、彼女の反応も激しくなってきた。前の
日の数度に及ぶ昇天にも関わらず、彼女は何
度も繰り返し頂点を極めていた。底知れぬ女
性の生命力を思い知らされた。
やがて、私の全てを絞り取るような動きが
局部に出た時、私は内に溜まった欲望の全て
を解放して長い営みに終止符を打った。彼女
の絶叫は私の耳にこだまのように残り、極め
た後も下半身には何時までも脈動する吸引が
続けられていた。私たちが正に一体になる儀
式だった。長い満足のいく闘いだった。

彼女が言うように、私も生きていることが

実感出来た。

わずか二泊の旅だったが、内容は充実していた。変わった環境での人の精神的高揚は歳に関係ないものだとも思い知らされた。何より私が連投出来たことが、当の本人にとっても驚きだった。その驚きとは人の持つ可能性に対する驚異で、同時に自分であきらめていたことが難無く可能になったことへの賞賛でもあった。

一泊した後の早朝、私は彼女の中に確かに自分を解き放った。さらに、その夜も役目を果たすことが出来た。そして帰る日の早朝、彼女の執拗な口による吸引で三度目の放出が叶った。

「私たち、新婚旅行だったみたい」と彼女が帰りの新幹線の中で呟いたのは、濃密な二人の秘儀を指していたのだろう。およそ二十四時間ばかりの間に私は三度の放出という、正に新婚当時の若い男の役目を果たせた。も

しかししたら常用しているノコギリヤシのお陰
かもしれないとも思った。だが実際には、私
の回春は彼女の存在抜きにはあり得なかった
だろう。

帰りの新幹線の中で心地良い居眠りをした
のは私だった。三連投の疲れだったのかもしれない。
彼女に起こされた時、列車は東京駅
に着いていた。

自宅のある郊外への電車に乗り換え、最寄
りの駅に着いた頃は陽が落ち掛っていた。私
は迷わず例の鮎屋に予約なしで飛び込んだが
カウンタ―は空いていた。彼女も私の選択に
は文句が無かった筈だ。

「今日はお出掛けでしたか」と店主は笑顔
で迎えてくれた。小旅行とはいえ、彼女が持
つ旅行鞆を見ての挨拶なのだろう。

浜名湖で食べた魚と、ここの鮎屋で食べる
魚とは異質のものだった。両方とも美味しか
ったが、微妙な違いを感じる事が出来た。

単純な調理法で出される新鮮な魚でも、日

本人の舌にはその微妙な差を感じることが出来るのだろう。目的に応じた素材の処理が私たちの感性に訴えてくるとしか言いようがなかった。

いつもより余計にお酒の代わりを注文して、彼女は始終ご機嫌だった。食欲も旺盛だった。この店を選んで良かったと思った。

帰り際に店の主人に「時期を見て、彼女と一緒になろうと思っっている」と告げて店を出た。

店を出たとたん彼女は驚いた目で私を見つめ、人通りがあるにも関わらず私に抱きついてきた。

彼女のマンションに着くと「大事な話を何故私に先にしないの」とかみ付いてきたが、怒ってはいなかった。涙声で「有難う」と言っただけで私の手を力の限りの勢いで握ってきた。

私は彼女を試した訳ではなかった。旅への誘いや、「あなた」と言い出したことなど考えると、私に何となく伝わって来るものがある。

った。宿帳に夫婦として私が記帳したことや仲居さんが「若い奥さんですね」と言ったことにも素直に喜んでいた。今の関係に何の問題も無かったが、彼女がどういう受け止め方をしていたのか、これまで確かめたことは無かった。

偶然とは言いながら、私は非常に肝心な夕イミングで自分の思いを彼女に伝えた結果になっっていた。

彼女が私に語ってくれたのは娘さんとその夫のことだった。特に娘さんの夫が「お母さんは騙されているのでは」という疑問を口にした時、彼女は言葉に詰まったという。マンシヨンを持ち、ある程度の資産があればそれを目的に近づく男は世間に幾らでも居るところだろう。娘さんも夫に言われて心配が増したそうだ。

「いい人が出来た」と最近娘さんに告げたのが問題のきっかけで、彼女が幾ら説明しても彼等に納得して貰えなかった。

その話を私にするため旅に誘ったが、彼女は言い出せなかったそうだ。挙句、鮪屋での私の発言を聞いて大変驚き、彼女は自分が間違っていたと確信し、安心したと正直に打ち明けた。

「あなたには予知能力があるの？」と真顔で聞いてきた、

私も彼女も結婚には拘ってなかったが、少なくとも今日の告白で私の真意は彼女の娘とその夫には伝わるだろう。

大人の恋愛として受け止めていた私には何の経済的打算も無かった。彼女も考えは同じだろう。それでも身内さえ素直に受け止めてはくれないようだ。とくに親の資産は子供にとっては何よりの関心事かもしれない。

家内と本道を歩いていた時には一切関係なかった懸念が、脇道では簡単に身内から出て来る事実には驚いた。本道の歴史は長く、脇道には最近入ったばかりだ。

短い道のみでは、すぐに周りの信頼を得る

ことは無理なのだろう。現代社会は持つものを守ることから全てが始まるようだ。味気ないが現実を否定する訳にもいかない。

人の約束事は、それぞれの利害が絡まって思わぬ方向に進むことがある。精神性の高さだけでは済まぬことを今まで幾らでも経験してきたが、これも人のしがらみのなせる業なのだろう。言い方を変えれば、彼女の娘夫婦はしつかりしているとも言える。

彼女が私に言い出せなかったのは、そのしつかりしている娘夫婦の助言を受け入れることが出来なかったからだろう。知らなくてもいい、人の持つ猜疑心を垣間見た思いだった。

その夜私は家内の遺影に長いこと語りかけた。だが、彼女の答えは短いものだった。

「お好きなように」という簡単な言葉に本道を共に歩いた者同士の信頼感があつた。

幾つになっても依頼心の強い、脆弱な男が

遺影の前でため息をついていた。

結婚するかどうかは、流れに任せるつもりだった。遺影も「それがいい」と言っているように見えた。そして心なしか、家内は微笑んでいるようだった。

終り